

令和7年度出土遺物公開事業

公益財団法人千葉県教育振興財団設立50周年記念展 part2

地中からのメッセージ—古墳・古代・中近世— 講演会

日時 令和7年2月15日(日) 10:30～15:30

会場 千葉県立中央博物館 講堂

開催趣旨

公益財団法人千葉県教育振興財団は、急増した国・県の大規模開発事業に伴う発掘調査に対応するために、千葉県の出資により、千葉県内における遺跡等埋蔵文化財の調査研究及び県民の文化財保護思想の涵養と普及等を図るとともに、開発と環境整備の調和を図り、県民生活の向上と地域文化の充実に寄与することを目的として、昭和49年11月1日に、財団法人千葉県文化財センターとして設立されました。

このたび、設立からこれまで積み重ねた発掘調査の実績と考古学上の成果を総括し、財団が将来にわたって公益に資する事業を継続していくことを目的として、令和6年度から7年度にかけて設立50周年記念展を実施しております。

今回展示している各時代について、さらに深掘りした講演会により、皆様に千葉県の歴史と考古学にさらなるご理解をいただけましたら幸いです。

10:30～10:35 開会挨拶

10:35～10:40 開催館挨拶

講演

10:45～11:55 「古墳時代の房総が語るもの」

白井久美子

(休憩)

13:00～14:10 「墨書土器からみえる古代房総のくらしと社会」 栗田 則久

14:20～15:30 「考古資料から見た千葉県の中近世」

津田 芳男



# 古墳時代の房総が語るもの

白井 久美子

はじめに

東海道の到達点にあって、弥生時代中期後半から急速に「弥生化」が進んだ房総は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落が爆発的に拡大するとともに、遠隔地から人が往来し、青銅製品をはじめ、鉄製品・ガラス玉・石製玉類など、最新の武器・利器や宝飾品が入っている。それらは集落の貴重品や祭器として、あるいは有力者の墓の副葬品として新たな価値観をもたらしたであろう。房総は、列島各地から流入する文化の坩堝としてあらゆる要素が集積され、その本質が凝縮された地域ともいえる。

1970年代～2010年代にかけて、県内で行われた大規模な発掘調査では、古墳時代の集落や古墳群をほぼ全域にわたって調査した例もあり、地域の様相を知る膨大な資料が蓄積された。

ここでは、この時代を象徴する古墳群の動向に視座を置いて、発掘された古墳時代の房総を考えることにしたい。

## 1 前半期の集落と古墳

この頃の大規模な集落は、東京湾沿岸に特に集中している。代表的な調査例には、菊間・大厩遺跡、草刈遺跡群、市原遺跡群、請西遺跡群、常代遺跡、打越遺跡があり、いずれも主要河川の下流域に立地している。この分布範囲は、房総を東限とする小銅鐸の出土範囲と重なっており、集落内には前代の方形周溝墓を引き継いだ有力者の墓が築かれている。一方、特定の個人墓として単独で築かれる大型の「方墳」が現れ、墳丘裾の一隅、あるいは中央部に通路状の突出部をもち、次第に後者の形態に収束する。埋葬施設には鉄剣(短剣)とガラス玉などの装身具が普遍的に副葬されている。これらは、やがて前方後方墳に発展し、集落を超えて流域を代表する首長墓となる。

一方、市原遺跡群には、円形の墳丘に前方部を付設する画期的な墳形を採用した神門古墳群が出現する。そのうちの5号・4号・3号の3基は、墳丘規模・埋葬施設の構造・副葬品・葬送儀礼の内容に革新的な要素をもち、三代にわたる変遷が明らかにされた点で前方後円墳成立期の指標となる例である。3基

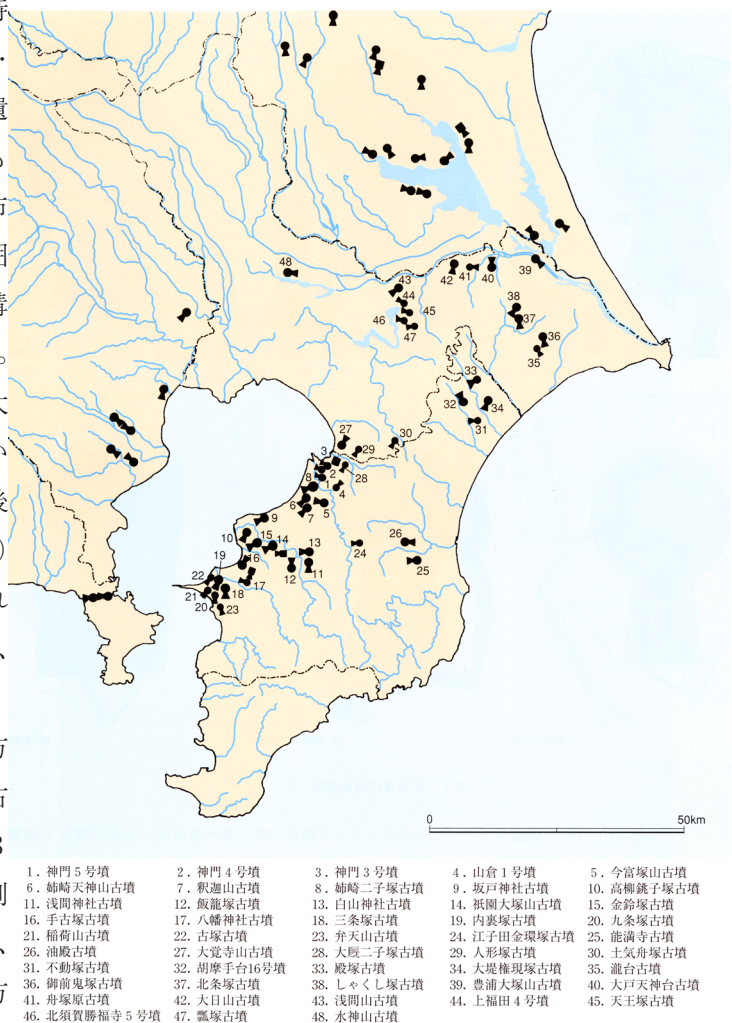


図1 房総の主要前方後円(方)墳

の副葬品の組成には、鉄槍・鉄剣・鉄鎌・ヤリガンナ・管玉・ガラス玉が共通する。鉄槍は呑口式で、同時期の小型古墳には副葬されない階層性の強い遺物である。また、墳丘儀礼には在来の土器とともに東海西部・畿内・近江・北陸系の土器が用いられており、弥生時代後期以来の東海地方以西との活発な交流によって発達した集落を背景にもつ。

しかし、神門古墳群に後続する首長墓は地域内になく、墳形や葬送形式は継承されていない。集落の首長墓は再び前方後方墳や方墳に戻ってしまうのである。また、前期後半の広域首長墓に採用される定型化した大型前方後円墳の系譜にもつながらない。この3基が他に先駆けてヤマト王権と特別の結びつきをもった特別な首長の墓であったことを示している。

## 2 前方後方墳の展開

前方後円墳は全国に約5,200基、前方後方墳は約500基ある。墳丘規模を比較すると、全国の上位46位までを前方後円墳が占め、ようやく47位に奈良県天理市西山古墳（墳丘長180m）が入るほか、100位までに入る例は3基にすぎない。巨大古墳が集中する近畿地方の例が少ないことも加えて、前方後方墳は前方後円墳より下位の墳丘形式、あるいは傍流の古墳と考えられてきた。しかし、大型の前方後方墳は、出雲地域を除くと前期で一旦姿を消しており、一概に比較できないといえる。また、同じ規模の例では副葬品の内容に遜色がなく、むしろ前方後円墳を上回る例も見られ、必ずしも前方後方墳の被葬者がより下位に位置づけられるとは限らないであろう。

### (1) 関東の前方後方墳

大型前方後円墳が定型化し、大和で飛躍的に規模を拡大する段階に、関東地方を中心とする東日本では、主要な大型古墳が前方後方墳で占められる。神門3号墳の後に大型の前方後円墳が継続しなかったのとは対照的に、出現期以来前方後方墳は次第に規模を拡大して定型化し、地域の中核をなす古墳に発展している。特に、出現期には大型古墳の見られなかった東山道沿いの内陸部（群馬県・栃木県）に墳丘長100m級の大型前方後方墳が集中する。

房総では、墳丘長55～56mの袖ヶ浦市滝ノ口向台8号墳・君津市道祖神裏古墳などの大型例もあるが、

墳丘長20～35mで前方部があまり発達しない型式が出現期から前期を通じて築かれている。

後者には、滝ノ口向台9号墳・柏市北ノ作1号墳・飯郷作1・2号墳があり、北ノ作1号墳で大刀・剣・鉄鎌・銅鎌・鉄斧・ヤリガンナなどの前期前半の希少な鉄製品副葬を確認できる。

また、前期の古段階を中心に中・小規模の前方後方墳が小規模な方墳を伴って群在する例が多い。弥生時代以来の方形周溝墓からつながる墓を母体とし

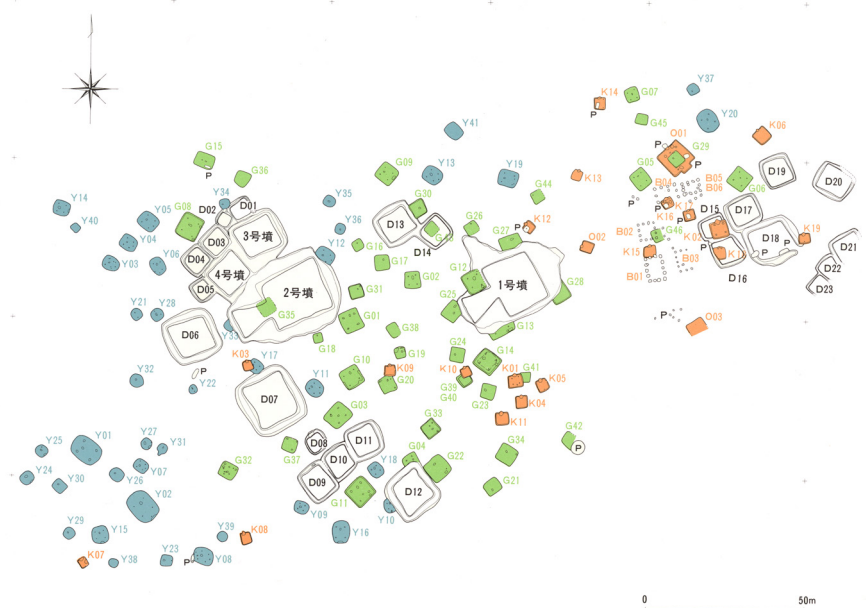


図2 飯郷作遺跡の遺構配置図

て変化し、大型古墳の被葬者の下に組織された構成員の墓として位置づけられる。草刈遺跡の例は、中央部の最も広い平坦面に築かれ、前方部の短小な出現期の前方後方墳を先駆けに方墳群が近接して築かれた。同様の例は、袖ヶ浦市山王辺田遺跡、市原市東間部多遺跡、佐倉市飯郷作遺跡にある。被葬者は、おそらく弥生時代後期に系譜をもつ有力者層から成り、彼らを率いた大型方墳、前方後方墳の被葬者とともに在地の基盤を維持した構成員であったと考えられる。

## (2) 前期の古墳群形成の基盤

草刈遺跡では、総数 6,800 基を超える遺構が発掘され、竪穴住居跡は約 4,000 棟、古墳は 170 基におよぶ。なかでも弥生時代中期～古墳時代の集落は質量共に充実し、竪穴住居の数は弥生時代 1,276 棟、古墳時代 1,916 棟に達する。

古墳時代前期は、弥生時代後期から続く集落の拡大傾向が一層顕著になり、竪穴住居の数は 1,200 棟におよぶ。台地のおよそ三分の二の範囲まで集落が広がり、中央部分には墓域が形成される。集落から出土する土器は東海地方西部を超えて近畿地方や北陸の影響を受けたものが出土するようになり、人々の交流圏がさらに広がったことを示している。また、小銅鐸に替って小型の銅鏡が出土し、この時代の房総の集落出土鏡 22 面のうち 12 面を草刈遺跡出土鏡が占める。弥生時代後期以降、一貫した小型銅製品の供給先として、その製作地と密接なつながりがあったものと思われる。

また、この地域の前期後半を代表する大型古墳の調査例に、菊間新皇塚古墳を挙げることができる。一辺 40 m の方墳として調査されたが、前方部が存在した可能性があり、少なく見積もっても墳丘長 60 m 級の大型墳になる。2 基の粘土槨から出土した副葬品は、小型の銅鏡・石釧・大刀・剣・鉄製農具類のほか、水晶・琥珀の勾玉、100 点を超える碧玉・緑色凝灰岩の管玉、ガラス玉などである。新皇塚古墳は、主要河川・村田川下流域の豊かな生産基盤をもつ菊間・大厩遺跡や草刈遺跡群を統括する首長墓と考えられる。

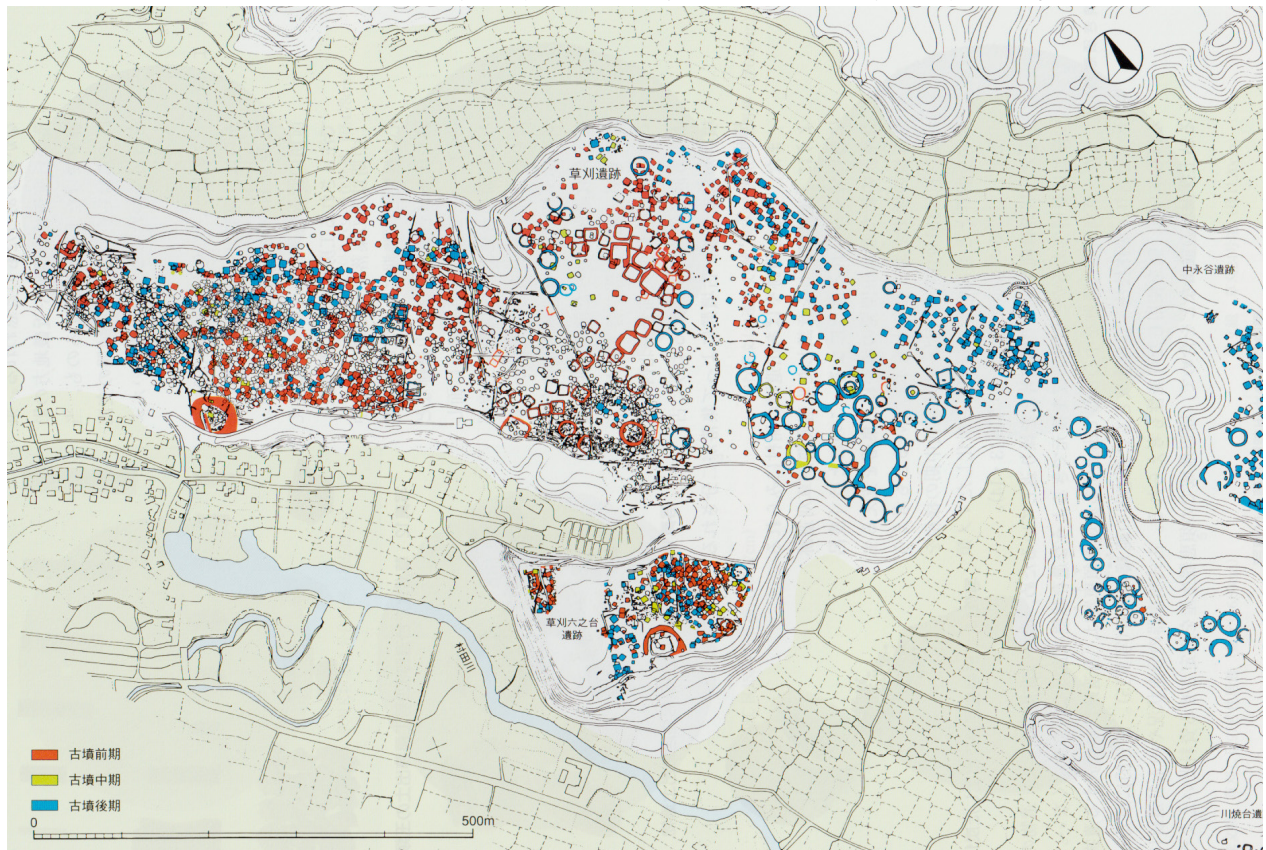


図3 草刈遺跡の遺構分布図

(3) 前方後方墳の消長

大型前方後方墳は前期に出現し、衰退するという限られた期間の動向を示している。また、最大規模は180 mを超えることなく、副葬品もその規模に応じた内容にとどまっているが、前期を通じて王権の中心域と周辺部の拠点に一定の規模を保って築かれていることは、その被葬者が前期の王権にとって重要な存在であったことを物語っている。特に、その主要な分布域が東方に偏っている点は、前期の東国進出に関わった王権中枢部と東国の有力豪族層の強い結びつきを示すものと考えられる。前方後方墳は東国に伝統的な方形の主丘部をもつ墳丘形式であり、前期ヤマト王権の東国進出と対峙した時代を象徴する首長墓の形式であったといえよう。そして、房総では後期末～終末期に復活するまで、前方後方墳は途絶えることになる。

3 中期の古墳と石枕

(1) 石棺と石枕

古墳時代中期の古墳では、木棺の頭部に石枕を置いた例が広く分布し、中期を通じて用いられている。特に、石製の立花と結びついて独特の埋葬形式に発展し、後の常陸南部～下総(常総)に集中して展開した。これらの石製葬具はいずれも滑石で作られており、副葬品や集落の祭祀に用いられた滑石製模造品と軌を一にして発達したものと考えられる。上毛野(群馬県)と常総は関東の滑石製品の二大分布地域であるが、常総でより特化している。

(2) 石枕の系譜と由来

石枕は石棺に彫刻されていた枕に由来すると考えられる。枕を造り付けた石棺の分布図を見ると、分布の中心は熊本県、香川県と福井県にあり、削り抜き式石棺を加工し得る石材が入手可能な地域に密集している。香川県の磨臼山古墳の石棺に彫刻された枕には、耳から首にかけて勾玉が陽刻されており、常総で発達する立花の意匠につながる点で注目される。

このような棺に彫刻された例とは異なり、完全に別作りの枕として独立した例が<sup>おおやまと</sup>大和古墳群南方の天理市渋谷で出土した石枕である。この石枕は棺の形から完全に離れて頭部の輪郭に沿った平面形をもち、全面に装飾的な彫刻が施されている。渋谷向山古墳の出土品と伝えられており、これが渋谷向山古墳に伴うとすれば、前期の王陵に単独の石枕の初源的な例を求めることができる。

(3) 「常総型」石枕

石枕の分布の中心は、現在の利根川下流域～霞ヶ浦沿岸一帯、前掲の香取海沿岸を中心とする常総地域にあり、立花を伴ってこの地域に発達した石枕を特に「常総型」石枕と称している。2003年に全国で120例ほど石枕が確認されたが、そのうち68例が常総地域に集中している。さらに、その中でも大須賀川流域の

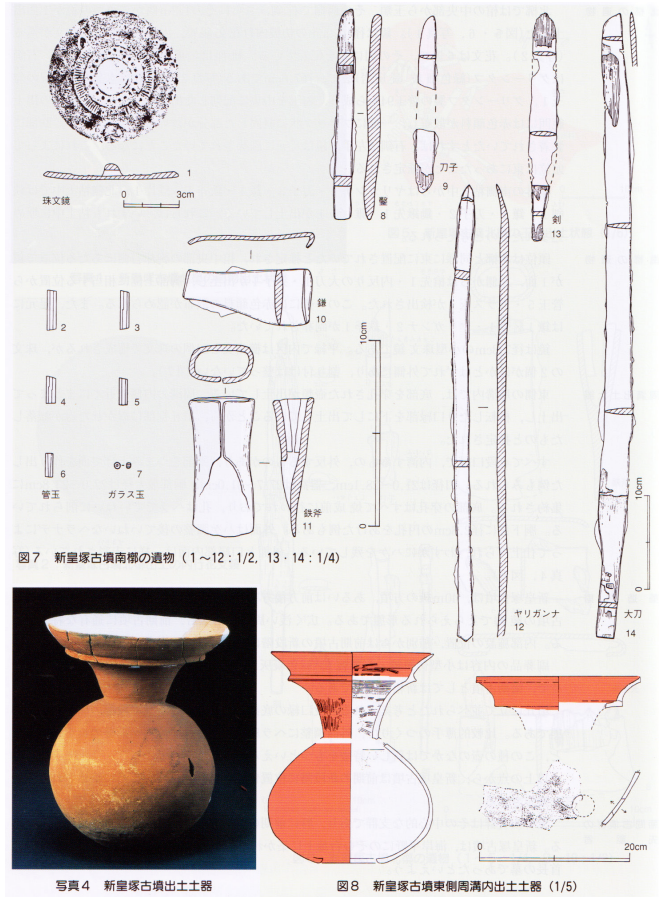


図7 新皇塚古墳南柳の遺物 (1~12: 1/2, 13・14: 1/4)

写真4 新皇塚古墳出土土器

図8 新皇塚古墳東側周溝内出土土器 (1/5)

図4 新皇塚古墳南柳の副葬品と壺

旧下総町（成田市）、神崎町、旧佐原市（香取市）周辺に特に集中し、神崎町に最も多くの出土例がある。神崎町の辺りは香取海の沿岸のなかでも、一番内海に張り出した眺望の良いところに位置する。石枕の集中的な分布は、おそらく水運を差配した豪族の本拠地であったことを反映していると思われる。石枕の素材である滑石を産出しない房総では、北関東地方から石材を入手するの必要があり、石材を容易に運ぶことのできる水運、あるいは流通の拠点が豪族の本拠地になり得たと考えられる。

（４）常総型石枕の出土状況

発掘調査例が増えるに従って、石枕の用途や性格を知る資料が明らかになった。千葉市上赤塚1号墳の調査例もそのひとつである。木棺内で石枕が出土し、頭の周りには装身具に加えて鎌や斧などの石製模造品が副葬されていた。また、石枕の周りには二つの勾玉を倒立して背中合わせに結びつけ、軸をつけた石製品

「立花」が散在していた。石枕にはこれを立てたと思われる孔があり、軸を差し込むとあたかも花が立っているように見えたための命名と思われる。ところが、石枕に立てられた状態で出土した立花はなく、全て石枕からはずれて出土している。さらに、この石枕には孔が五か所しかないにもかかわらず立花は6点出土し、1点は石枕の下に置かれていた。この立花は極端に軸の短いもので、直接石枕に立てたものではなく、おそらく死者の魂を鎮めるために枕の下に置かれたものと思われる。このように、石枕と立花が一緒に出土するのがこの地域の石枕の特徴である。また、どの調査例を見ても立花が装着されて出土した例はなく、埋葬時には立花が取り外されているのも注目すべき点である。



図5 常総型石枕分布図

（５）「殯」の風習

千葉市石神2号墳では石枕の用途や性格を知る上で重要な例が発掘調査されている。木棺の両端から二つの石枕が出土し、長大な一つの棺に二人が埋葬されていたのである。北側の枕に伴って九つ、南側でも九つの立花が出土し、立花の細部をみると勾玉部の辺りに傷のような部分があり、これを顕微鏡で見ると地上に棲息するネズミの菌型であることがわかった。棺が地上にあった時点でネズミが侵入し、おそらく石枕に装着されていたと思



図6 上赤塚1号墳の石枕出土状況

われる立花の勾玉部をかじったと推定された。すなわち、その歯型が一旦亡くなった人を一定期間安置し、遺体を祀る期間を経た後に本格的に埋葬したことを示していると考えられたのである。

このように遺体を埋葬する前に別の場所に安置しておくことは、古代の文献に「殯」として記されており、6世紀中頃から8世紀初めの「殯の宮」安置の様子が窺える。石神2号墳の例は、殯が広く一般にも行われていた頃の様子を知る発掘例として注目された。立花は「殯」のような遺体を安置して祀る期間に石枕に装着され、その間が葬送儀礼の重要な場面であったと考えられるのである。

#### 4 渡来文化の波

石枕と立花が展開した背後では、半島系文物の搬入と新技術の導入・定着が進行している。まず、古墳の副葬品を見ると、中期前葉は、半島から搬入された新型の鉄製利器・武器と共に滑石製品の副葬が始まって主要な副葬品となる時期であり、市原市大厩浅間様古墳・多古町多古台 No.8 地点6号墳などに例がある。近畿地方を中心として西日本では、主要古墳に搬入された陶質土器が副葬され



図7 鎌取遺跡の鍛冶具と鉄製品

た。間もなく、大阪南部で国産の陶質土器として須恵器の生産が始まる。古墳の副葬品を見ると、市原市草刈1号墳のように、多種多様な鉄製武器・農工具類が含まれるようになり、本格的に鉄製品が波及したことが窺える。

初期須恵器生産が本格化する時期（陶邑 ON231 号窯期～TK73 型式前葉期）には、立花と石枕が組み合った常総型石枕の成立期にあたり、前掲の上赤塚1号墳、石神2号墳の例がある。いずれも、鉄製武器・農工具が滑石製品に伴って副葬された。また、この頃には集落内に鍛冶関連施設が定着し、鍛冶炉のほか、鞆の羽口や鉄床石を備えている。千葉市南二重堀遺跡では鉄素材の鉄鋌、鎌取遺跡や古山遺跡では甲冑片や鉄鎌、農工具など古墳に副葬されるような製品が竪穴住居から出土しており、それらの修理や再生を行う鍛冶工人がいたことを物語る。

中期中葉には須恵器が定型化する（TK73 型式期～TK216 型式期）。常総型石枕祭祀も定型化し、発展した時期といえる。主要な大型古墳の副葬品に新型の鉄製利器・武器とともに新式の甲冑や胡☆などの武具が加わる。一方では、多種多様な滑石製品が副葬され、常総型石枕の分布域も拡大する。東京湾岸の大型首長墓として築かれた姉崎二子塚古墳に直弧文の彫刻を飾った最も優美で精巧な石枕がもたらされたのは、まさにこの時期であった。

東京湾岸に墳丘長 100 m を越える大型前方後円墳が連続して現れ、それまでほとんど埴輪の波及しなかったこの地域で突然窖窯焼成による埴輪を墳丘に立てている。木更津市高柳銚子塚古墳に続いて富津市内裏塚古墳、市原市姉崎二子塚古墳が築造された。姉崎二子塚古墳の副葬品には、石枕のほか、銅鏡3面・銀製長型耳飾り1対・玉類・金銅装衝角付冑・鉄鎌・鎌などがあり、冑は衝角・伏板と後部、左右側面の中央に金銅板を被せたいわゆる四方白の鉄地金銅装冑で、王権の半島との対外交渉によって移入された最新の武具である。これらが姉崎二子塚古墳の被葬者にもたらされた経緯には、新たな王権中枢との関わりが強く影響し

ていることは確かであろう。一方、石枕には滑石製の立花6点が伴っており、これらは香取海圏との接点を見出し得る副葬品である。また、内裏塚に埴輪を供給した木更津市畑沢埴輪窯跡で、古式の飾り馬具を装備した馬形埴輪が出土していることは、渡来文化受容の一環として房総にも馬文化が導入されたことを示している。

中期の後半に入る（ON46型式～TK208型式期）と、鉄製武器・武具を副葬する被葬者層が拡大し、中小規模古墳への武具副葬が飛躍的に伸びる。胡☆（ろく）は該当する5例すべて、短甲は10例中7例がこの時期に集中している。また、集落内の祭場でも多数の鉄器が捧げられた。実用の鎌や鋤先などのほか、鉄鋌を切断したものや鉄製農工具の雛形が多く含まれている。木更津市千束台遺跡や成田市中岫遺跡の例を挙げることができる。また、集落に須恵器が定着しており、草刈遺跡では赤焼須恵器の生産が始まる。



図8 草刈六之台遺跡の須恵器

「王賜」銘のある鉄剣を副葬した円墳（稲荷台1号墳）が現れたのはこの頃である。鉄剣の持ち主は金銅装蝶番を付けた最新式の短甲と新型の鉄鎌を佩用していた。常総の石枕が最も発展した頃、東京湾沿岸は王権との関わりを強めて、朝鮮半島から輸入された最新の武器と武具を手に入れ、王権に出仕していたのである。

中期後葉～末葉（TK23型式～TK47型式期）には、中小規模古墳の副葬品に武具に加えて、馬具の確実な出土例を確認できる。埴輪の樹立・須恵器の副葬も中小規模古墳まで普及する。代表的な例に香取市鶴崎天神台3号墳がある。常総型石枕は変容が始まり、立花と共に急速に衰退してその役割をほぼ終えている。

## 5 後期大型前方後円墳と石材・埴輪の広域移動

### （1）後期の大型前方後円墳

後期になると再び関東の古墳は大型化し、副葬品が最も充実する。北武蔵などの新興の地も加えて内陸・海道の各地に大型前方後円墳が築造され、西日本とは大きく異なる様相を呈してくる。畿内や西日本各地で大型前方後円墳が造られなくなる6世紀以降に、依然として大型前方後円墳の造営を行い、その規模と数で畿内を圧倒するのである。後期前半（6世紀前半）に規模を縮小していた房総の前方後円墳も、後半には再び規模を拡大した。それらは畿内の大王や有力豪族の墓に匹敵する規模をもち、群馬県高崎市綿貫観音山古墳、木更津市金鈴塚古墳などでは、王族や中央の有力豪族の墓に迫る豪華な副葬品が出土している。この後期大型前方後円墳の造営に見える関東の特異性は、ヤマト王権の東北進出を背景とした政治的・軍事的基盤としての重要性によるところが大きい。また、関東各地の豪族がそれぞれ中央の有力豪族と結んで一定の領域を支配した構造を反映したものであろう。

### （2）内陸の路と海の路－東山道と東海道－

その消長については内陸と海道で様相に違いが見られる。内陸の拠点である後の上野では後期大型前方後円墳が小地域に分散して万遍なく分布し、それぞれ核となる古墳の規模も拮抗している。ところが、終末期

の大型古墳は総社古墳群に集約され、上野の頂点に立つ首長墓が現れる。これに対し、上総・下総・常陸では大型前方後円墳を築いた新旧の勢力は、再編されながらも後の郡単位に近い小地域内に終末期の大型古墳を造営しているのである。両地域に挟まれた下野・北武蔵では、特定の地域に後期の大型前方後円墳が集中し、終末期の拠点に再編される点でより上野に近い。これは、文献に見える上野・下野・武蔵の大国造と上総・下総・常陸の小国造の様相を示唆する状況としても注目されてきた。

また、横穴式石室の受容と展開にも内陸と海道では相異がある。上野はその初源から畿内色が強く、特に大型古墳に一貫して畿内の直接的な影響が見られる。上総・下総・常陸の横穴式石室も畿内の影響を受けているが、その様相は多様で、長大な無袖型・片袖型、片岩板石組、胴張型など在地の石材を生かした型式や地域色の強い型式が用いられた。

(3) 石材・埴輪の広域移動と地域首長の交流

一方では、石材の流通を核とした地域間交流が石室の型式にも影響を与えている。筑波片岩の流通圏では、板石組の横穴式石室・箱式石棺・石棺系横穴式石室が広く採用され、板石組横穴式石室の構造には、筑波から約60km西の行田市小見真観寺古墳の緑泥片岩石室に共通する例があり、北武蔵と香取海水域圏との結びつきが窺える。また、磯石・緑泥片岩の流通をめぐる東京湾の交流圏にも北武蔵が関わっており、総武・常総の2つの水域に見られる後・終末期古墳の様相は内陸に比べてより多元的である。

関東の後期古墳を特徴づける重要な要素に、埴輪の樹立が挙げられる。地域によって様々な動きはあるが、特に後期になって造墓を開始した古墳群に顕著な現象といえる。埴輪の製作や供給にも地域を越えた交流が見られる。後・終末期の千葉市生実・椎名崎古墳群では、最も規模の大きい前方後円墳・人形塚古墳に唯一埴輪が樹立され、あご髭を蓄えた武人埴輪が特徴的な古代武射郡域に系譜のある人物埴輪が用いられた。形象・円筒埴輪の製作技法を含めて同系の工人によって製作されたことがほぼ確実な資料である。これらの埴輪は太平洋側から約30kmの道のりを越えて運ばれた可能性が高い。また、墳形・長方形周溝の採用も武射郡域の例と共通している。両地域は後期になって新興の集落と古墳群が形成された地域であり、双方の首長がいくつもの小

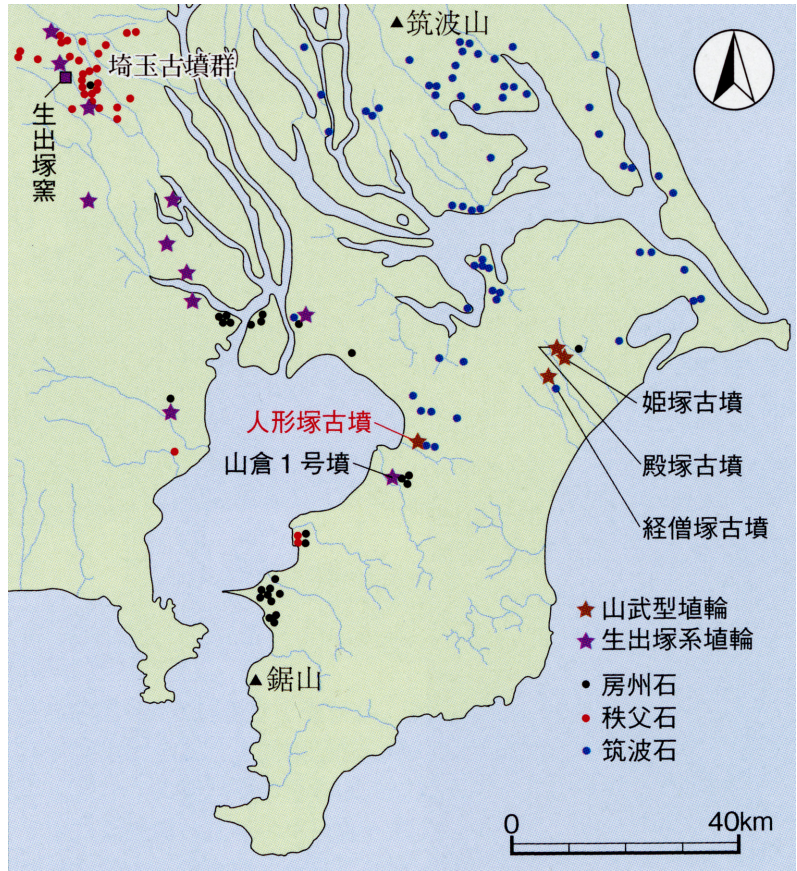


図9 石材と埴輪の広域移動



図10 人形塚古墳の人物埴輪

地域を挟んで交流する関係にあったことを示している。

また、ほぼ同時に規格性の高い「下総型埴輪」が香取海南岸を中心に盛行する。下総型埴輪は南下し、石枕と同様に上総北部の養老川下流域に達する。この時期に両地域の接触・交流が再び活発化したことが窺える。東山道の拠点である上野が次第に纏まりを示すのに対し、総武・常総はあくまで二極構造を崩さず、その構図は終末期まで変わらない。

## 6 終末期大型古墳と群集墳

### (1) 龍角寺岩屋古墳造営の背景

後期後半の動向の延長上に終末期の状況を考えると、常総の水域の一角に一辺約80mという、当時の王陵を超える巨大な方墳・岩屋古墳が築かれた必然性が浮かび上がる。岩屋古墳を擁する龍角寺古墳群では、方墳出現の前段階になって墳丘長78mの古墳群最大の前方後円墳・浅間山古墳が築かれている。畿内では大型古墳の築造は王陵と一部の有力豪族墓に限られ、前方後円墳の築造は既に終焉しているが、関東地方では依然として他を凌駕する古墳を造り得たのである。

### (2) 後・終末期古墳群の構造と特徴

本県では、100基～300基を超える後・終末期古墳群が各地で調査されている。佐倉市岩富古墳群（210基）・四街道市物井古墳群（120基）・千葉市生実・椎名崎古墳群（307基）・市原市市原古墳群（306基）・木更津市請西古墳群（108基）などである。龍角寺古墳群は115基確認されているほぼ全体が後・終末期古墳と推定される。最後に、これらの古墳群の動向に改めて注目してみたい。

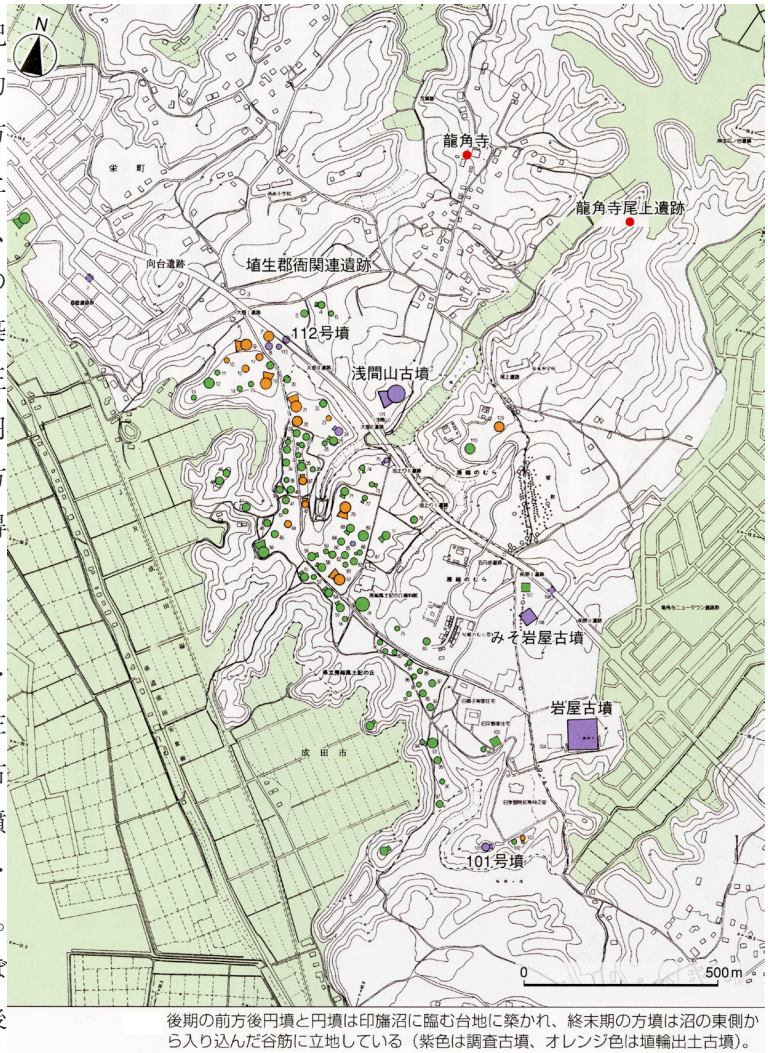


図11 龍角寺古墳群の分布図

近畿地方を中心とする西日本の後・終末期群集墳は、後期後半には前方後円墳そのものが造られなくなり、円墳・方墳化して群中に埋没し、極めて等質的な多数の小円（方）墳によって構成される。これらは群形成の核となる大型墳をほとんど含まず、大型墳とは明らかに墓域を異にしている。

一方、房総をはじめ、関東における後・終末期群集墳には最後まで核となる大型墳が存在し、前方後円墳・帆立貝形古墳を中心に形成された古墳群が方墳の導入期まで存続している。特に、小規模な前方部をもつ墳丘長20～30mの帆立貝形古墳が円墳と共に群在するのは特徴的である。前方後円墳－帆立貝形古墳－小規模な円墳、あるいは方墳によって構成された古墳群は墳形・規模に一定の格差をもっており、内部施設の構

造や素材の共通性に密接な関係が窺える。このような群構成の特徴は、核となる古墳の被葬者と構成員に紐帯が保たれた旧来の統治形態をより広範に実現したことを示しているといえるであろう。終末期に至っても大型首長墓は前方後円墳を採用しており、やがて大型方墳・円墳を頂点にした構成に切り替える。

これを特定の王族・貴族と在地首長との関係だけで説明することは不十分で、古墳時代前期、さらには弥生時代後期に遡る地域的紐帯とそれを支えた中堅層の安定した成長を重視する視点が必要であろう。その中堅層こそ弥生時代後期の方形周溝墓に系譜を引く在来の中小規模古墳群の被葬者層であり、彼らを基盤にした在地首長層の成長が新興の有力者層も取り込んだ地域統治を可能にし、列島最大規模の終末期方墳を出現させたのでないかと思われる。

#### 主な引用・参考文献

- 神野 信 2011『ムラの鍛冶屋の考古学』千葉県立房総のむら  
齋木 勝ほか 1974『市原市菊間遺跡』（財）千葉県都市公社  
白井久美子 2016『最後の前方後円墳 龍角寺浅間山古墳』新泉社  
高木博彦ほか 1979『日本の石枕』千葉県立房総風土記の丘  
田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号 早稲田大学考古学会  
千葉県史料研究財団編 2003『千葉県の歴史 資料編 考古2』弥生・古墳時代 千葉県  
千葉県史料研究財団編 2004『千葉県の歴史 資料編 考古4』遺跡・遺構・遺物 千葉県  
沼沢豊ほか 1977『東寺山石神遺跡』（財）千葉県文化財センター  
沼沢豊ほか 1978『佐倉市飯合作遺跡』（財）千葉県文化財センター

# 墨書土器からみえる古代房総のくらしと社会

栗田 則久

## 1 はじめに

7世紀の中国や朝鮮半島での国家興亡の激しい時代を背景に、古墳時代の大王を中心とする大和王権は新たな国づくりをせまられ、大化の改新の後に唐や新羅の律令を学んで、大宝律令が成文化されました。全国を60余りの国に再編し、かつて11もの国造が分立していた「球の国」も上総国・下総国・安房国（いわゆる房総三国）となり、発掘調査の成果などから各国の様相が徐々に明らかとなってきています。

財団法人千葉県文化財センターが設立された昭和49（1974）年は、京葉道路及び国道16号建設に伴う千葉市東寺山戸張作遺跡のみの発掘調査でしたが、翌年度には大型区画整理事業となる千葉東南部地区や千葉北部（千葉ニュータウン）などの大規模な調査が開始されました。その後数多くの遺跡が調査され、さまざまな成果が公表されてきました。ここで扱う奈良・平安時代の遺構や遺物が発見された遺跡は、千葉県文化財センター調査分だけでも500遺跡以上にのぼっています。

今回は、当財団が調査を行った遺跡を中心に、全国最多の出土量を誇る墨書土器を通して見えてきた奈良・平安時代の房総の地域社会の一端を考えてみます。

## 2 墨書土器

遺跡からはさまざまな文字などが記載された資料が出土しています。その中の一つが墨書土器で、他に漆紙文書や木簡、文字瓦、墓誌、鏡、剣、刀、銭貨などがあります。ここでは、土器に漢字などの文字や記号・絵などを墨で書いたもの、ヘラや釘などを用いて刻んだものを総称して墨書土器とします。

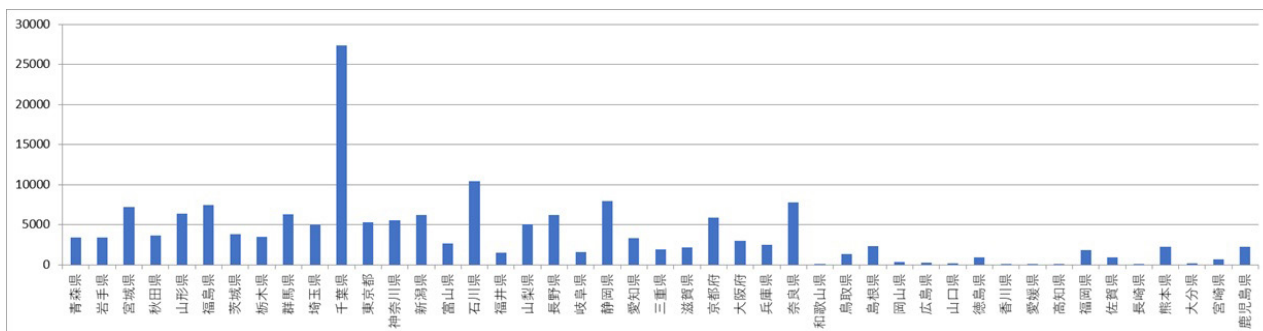


図1 全国都道府県別墨書土器出土点数



図2 千葉県内市町別墨書土器出土点数と遺跡数

千葉県内の遺跡から出土する墨書土器には、さまざまな施設名や人名、地名など具体的な内容を示すものもみられますが、特に1文字ないし2文字のみの記載が圧倒的に多くなっています。このような墨書土器については、集落内での何らかの祭祀や儀礼に際しての使用や集落や集団の標識文字としての側面などが想定されていますが、その用途や性格についてはいまだ不明の部分が残されています。

明治大学日本古代学研究所の『全国墨書・刻書土器データベース』によると、全国の墨書土器の総点数は17万点にのぼり、千葉県は全国一の出土量27,343点を数えます。次いで石川県の10,408点、静岡県7,949点などとなり、圧倒的な点数となっています。一方、千葉県内の状況を見てみると、下総地域で21,336点、安房地域を含めた上総地域で6,007点となり、総点数の78%が下総地域から出土しています。下総地域の中で墨書土器を出土した遺跡を市町村ごとにみると、八千代市が32遺跡3,689点、成田市が103遺跡2,344点、佐倉市が63遺跡2,064点、印西市が28遺跡1,972点などとなり、印旛沼周辺に集中する傾向にあります。また、出土点数の多い遺跡をあげると、1位が習志野市谷津貝塚で1,483点、2位が印西市鳴神山遺跡で1,158点、3位が八千代市上谷遺跡で1,043点などとなっています。

### 3 墨書土器を多く出土する集落遺跡

県内で調査された集落遺跡の消長をみると、古墳時代から奈良・平安時代にかけて集落が営まれる「継続型集落」と7世紀後半の飛鳥時代以降に突如として大きな集落が形成される「開発型集落」の2つのタイプに大きく分けられます。特に後者は、別の地域から移動・移住してきた人々によってそれまでは生活の痕跡がなかった台地の開発が行われた結果、新たな集落が形成されると考えられており、房総の集落遺跡の大きな特徴となっています。先述した墨書土器を多く出土する遺跡の集落開始時期を見てみると、白幡前遺跡は7世紀後、谷津貝塚・上谷遺跡は7世紀末、鳴神山遺跡は8世紀初頭となり、「開発型集落」に墨書土器が多く出土する傾向にあります。唯一、高岡大山遺跡は5世紀末から集落が継続して営まれる「継続型集落」となりますが、7世紀末頃に出現する規則的な配置の立柱建物群が以降も継続して建てられている点や銅鏡・皇朝十二銭などの一般集落ではあまりみられない遺物の出土など

から、郡司などの有力者が介在した官衙的な集落と想定されています。印旛沼周辺という地域性もあり、積極的に墨書土器が使われたものと考えられますが、後述する多文字や人面墨書土器は含まれておらず、ここに一般集落との違いが表れているようです。

### 4 墨書土器からわかること

書かれた文字や絵画をさまざまな角度から検討することによって、墨書土器は遺跡の性格や集落内に住む

番号	遺跡名	市町村	点数	竪穴建物数	掘立柱建物数	時期	多文字	人面	備考
1	谷津貝塚	習志野市	1483	459	237	7末～10前	×	×	牧
2	鳴神山遺跡	印西市	1158	206	43	8初～10前	○	×	
3	上谷遺跡	八千代市	1043	253	207	7末～10末	○	○	栗谷遺跡含む
4	白幡前遺跡	八千代市	827	279	150	7後～10前	○	○	
5	高岡大山遺跡	佐倉市	773	511	223	5末～11前	×	×	
6	上総国分僧寺	市原市	510	158	95	8前～11後	×	×	
7	船尾白幡遺跡	印西市	483	74	36	7中～10前	×	×	官衙的集落
8	鉢ヶ谷遺跡	東金市	441	351	234	7後～10中	×	×	
9	村上込の内遺跡	八千代市	365	155	24	8初～9末	×	×	
10	小屋の内遺跡	四街道市	356	283	142	8前～10中	×	×	

表1 千葉県内の墨書土器を多く出土する遺跡

人々の様子などを知るための一つの資料として重要な位置を占めています。以下では、千葉県の大きな特徴である多くの文字が書かれた墨書土器などを紹介するとともに、墨書土器のあり方が遺跡や地域の解明に大きく寄与した当財団の調査例を取り上げて考えてみます。

(1) 多文字墨書土器

千葉県内からはこれまでに60点ほどの多文字墨書土器（破片のため可能性のあるもの含む）が出土しており、その分布は八千代市・印西市・成田市などの印旛沼周辺に集中しています。その中で特徴的なのが、「地名（国・郡・郷）+人名+身召代+進上+（年月日）」という文章的な記載方法を採用する墨書土器の存在です。このような墨書土器の文字内容については「召代」の解釈などからおおむね2つの考えが示されています。1つは、「召代」を「召される代わり」に土器に供物を盛って神に対して饗応するという延命祭祀の説、2つ目は、「召代」を「招代」と解釈し、神を招いて安置

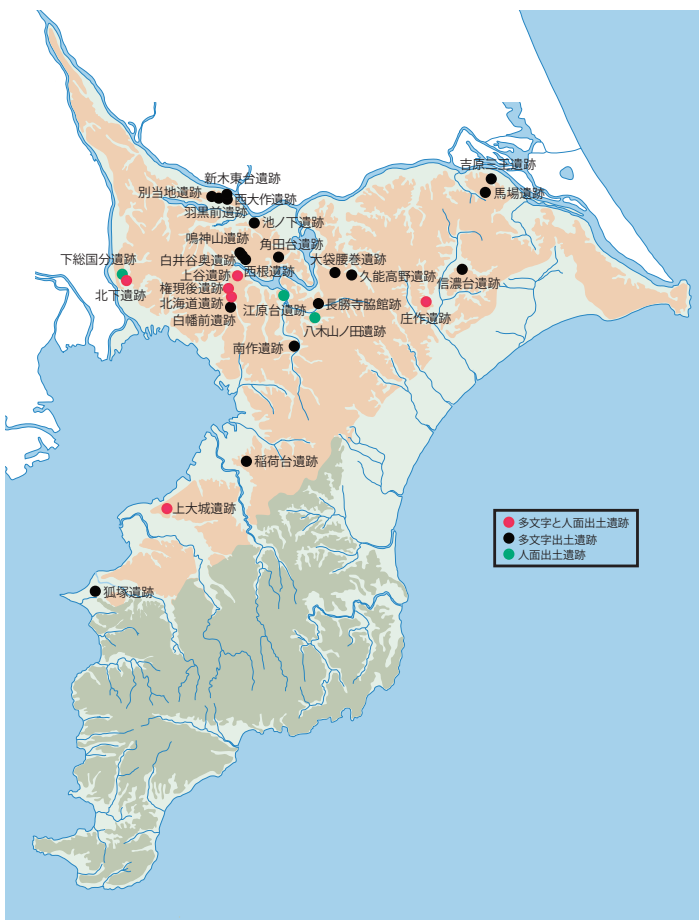


図3 多文字・人面墨書土器出土遺跡分布図

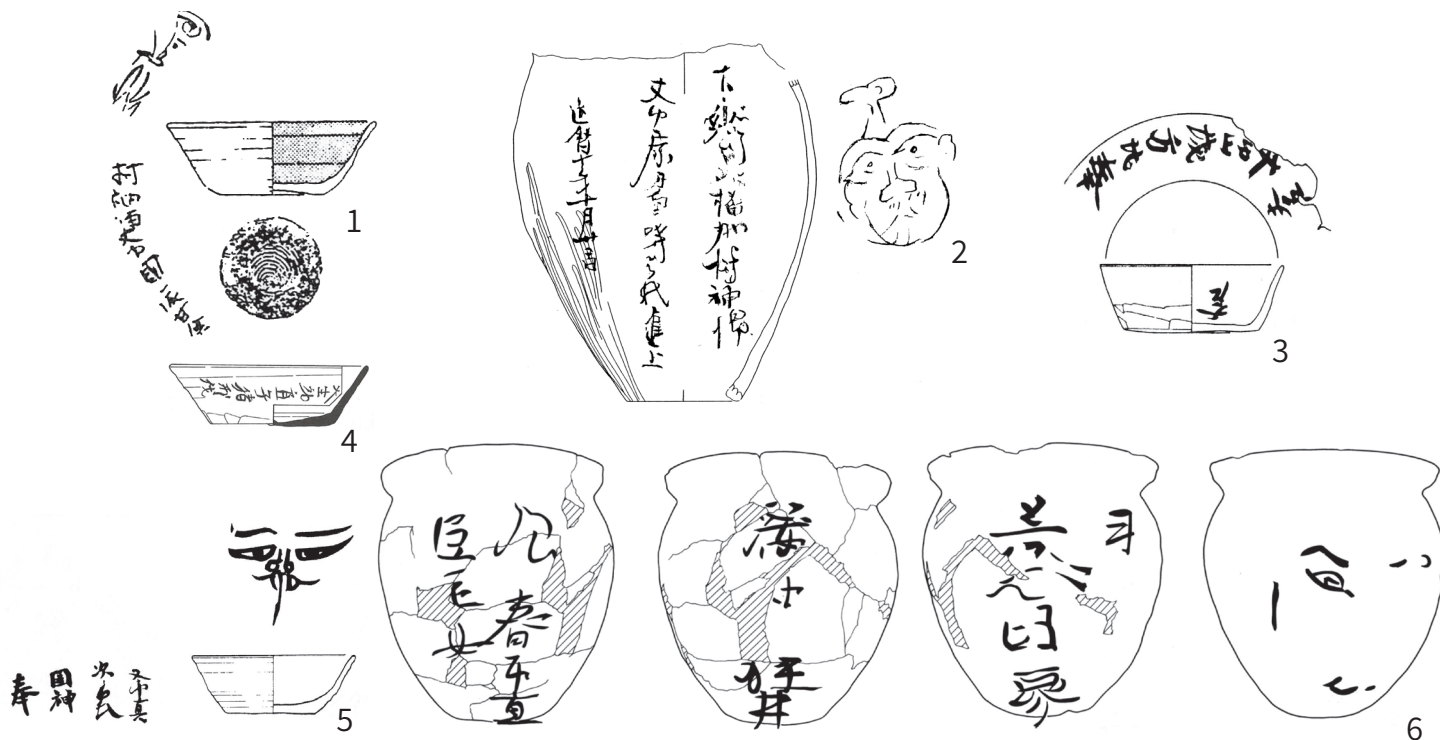


図4 主な多文字・人面墨書土器

する「依代」としての土器とする説です。これらについてはさらなる検討が必要ですが、いずれにしても、印旛沼周辺地域では定型的な書式で書かれた多文字墨書土器を使った祭祀行為が盛んに行われていたことを表しています。

このようなタイプの墨書土器は、八千代市萱田遺跡群中の白幡前遺跡・北海道遺跡・権現後遺跡、上谷遺跡、印西市鳴神山遺跡、西根遺跡、角田台遺跡、酒々井町長勝寺脇館跡、富里市久能高野遺跡、芝山町庄作遺跡、香取市吉原三王遺跡の11遺跡で確認されています。この中で、印旛沼周辺以外の遺跡に芝山町庄作遺跡と香取市吉原三王遺跡があります。吉原三王遺跡については後で説明するように、香取神宮との関係が深い遺跡で、印旛沼周辺の多文字墨書土器とは異なる使用目的が考えられます。一方、庄作遺跡の多文字墨書土器は印旛沼周辺とほぼ同様の記載様式ですが、全ての多文字墨書土器に「国玉神」・「国神」・「歳神」という神名が書かれています。印旛沼周辺の鳴神山遺跡で「国玉神」・「大国王」、西根遺跡で「大神」が見られますが、具体的な神を意識した祭祀行為が庄作遺跡の大きな特徴と言えるでしょう。多文字と人面が書かれた資料としては、印旛沼周辺とは遠く離れた袖ヶ浦市上大城遺跡でも出土しています。

また、鳴神山遺跡の「弘仁九年九月廿□」（西暦818年9月）、北海道遺跡の「承和五年二月十□」（838年2月）などのように多文字墨書土器に記載された「年月日」も祭祀行為が行われた期日や土器の実年代を考える上で重要な役割を果たしています。

(2) 村の中の寺

国分寺や郡寺などの官寺の他に私的な寺の存在が発掘調査によって明らかになっていますが、特に千葉県

No	市町村	遺跡名	墨書	人面	器種	時期
1	八千代市	権現後遺跡	村神郷丈部国依甘魚	○	杯	9c前
2		上谷遺跡	下総國印旛郡村神郷丈部廣刀自咩召代進上延曆十年十月廿二日	○	甕	8c後
3	印西市	鳴神山遺跡	丈尼／丈尼／丈部山城方代奉	×	杯	8c後
4		西根遺跡	大生部直子猪形代	×	杯	8c後
5	芝山町	庄作遺跡	丈部真次召代国神奉	○	杯	9c前
6	袖ヶ浦市	上大城遺跡	司／□(益ヵ)□家／海上□狭井／郷春部直／臣主女	○	甕	9c前

表2 図4の墨書土器属性表



「承和二年十八日□□」

835年

上谷遺跡



「弘仁十二年二月」

821年

上谷遺跡



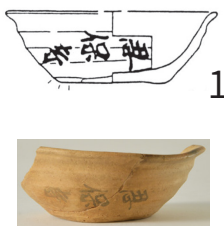
「弘仁九年九月廿」

818年

鳴神山遺跡

図5 年月日が書かれた墨書土器

図5 年月日が書かれた墨書土器。印旛沼周辺の鳴神山遺跡で「国玉神」・「大国王」、西根遺跡で「大神」が見られますが、具体的な神を意識した祭祀行為が庄作遺跡の大きな特徴と言えるでしょう。多文字と人面が書かれた資料としては、印旛沼周辺とは遠く離れた袖ヶ浦市上大城遺跡でも出土しています。



「忍保寺」



「大寺」



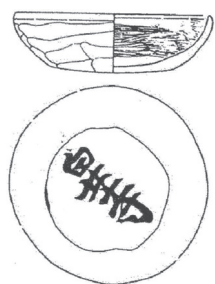
「新寺」



「忠寺」



「延忠」



「白井寺」

図6 寺名が書かれた墨書土器 (1～3加良部遺跡、4・5山口遺跡、6六拾部遺跡)

内ではその事例が多く確認されています。墨書土器としては、一般的な「寺」・「仏」以外に寺名を書いた墨書土器が下総国を中心に出土しています。当財団の調査例をあげると、成田ニュータウンの加良部遺跡の「忍保寺」・「大寺」・「新寺」、山口遺跡の「延忠」・「忠寺」の墨書土器があります。前者の正式な寺名は「忍保寺」で、別称として「大きな寺」や「新しい寺」と呼ばれていたことが想定されます。後者はおそらく「延忠寺」という寺名で、「延忠」は僧侶名であった可能性があります。前者の「忍保」も同様に僧侶名と考えられます。一方、佐倉第三工業団地の六拾部遺跡から出土した8世紀末～9世紀初頭頃の墨書土器「白井寺」の「白井」については明らかではありませんが、佐倉市・八街市・千葉市にまたがる千葉氏一族の白井氏が支配した中世の「白井荘」が周辺一帯に想定されていることからすると、名字の地としての「白井」がという地名が奈良時代終わりごろには付近に存在していた可能性も考えられます。地名を付けた寺の例としては、佐倉市長熊廢寺の「高罌寺」（佐倉市高岡）、佐倉市坂戸・広遺跡の「坂津寺」（佐倉市坂戸）、市原市草刈遺跡の「草苺於寺坏」（市原市草刈）などがあり、現在の地名が古代まで遡って存在していたことが分かる貴重な資料となっています。

### (3) 下総国府域の境界祭祀—市川市北下遺跡—

外環道建設に伴って2008～2012年に調査したに市川市北下遺跡では、下総国府及び国分寺に関連する遺構や遺物が見つっています。検出された旧河道からは、多くの墨書土器や祓に用いられた可能性のある形代（斎串・人形ほか）などが出土しました。墨書土器は総数 点で、「葛」（葛飾郡）・「匠」（匠瑳郡）、「結郡」（結城郡）、「香取／小川」（香取郡小川郷）、「軽部」（海上郡軽部郷）等は、古代下総国内の広域に点在する郡郷名を記載したものと想定され、国府に関連する北下遺跡の性格の一端を示しています。また、郷名を記載したものと考えられる「浮嶋郷長」の出土も注目されます。「浮嶋郷」という郷名は確認されませんが、古代東海道の駅名として『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条などに「浮嶋駅」という駅名が見られ、浮嶋駅が所在する郷が「浮嶋郷」と考えられます。浮嶋駅の比定地については明確にはなっていませんが、文献史料などから推定される習志野市津田沼・鷺沼付近が有力とする説や、『延喜式』にみえる下総国の諸国牧の一つである「浮嶋牛牧」の中心地が習志野市谷津貝塚である可能性が高いことなどから、この周辺が「浮嶋駅」及び「浮嶋郷」の比定地として浮かび上がってきます。一方で、『倭名類聚抄』記載の葛飾郡内の郷の1つである「駅家郷」（推定：市川市市川周辺）が「浮嶋駅」と関係する可能性もあり、市川市内に所在していた



図7上 北下遺跡位置図



図7下 斎串 (左)、人形 (右)

墨書土器からみえる古代房総のくらしと社会

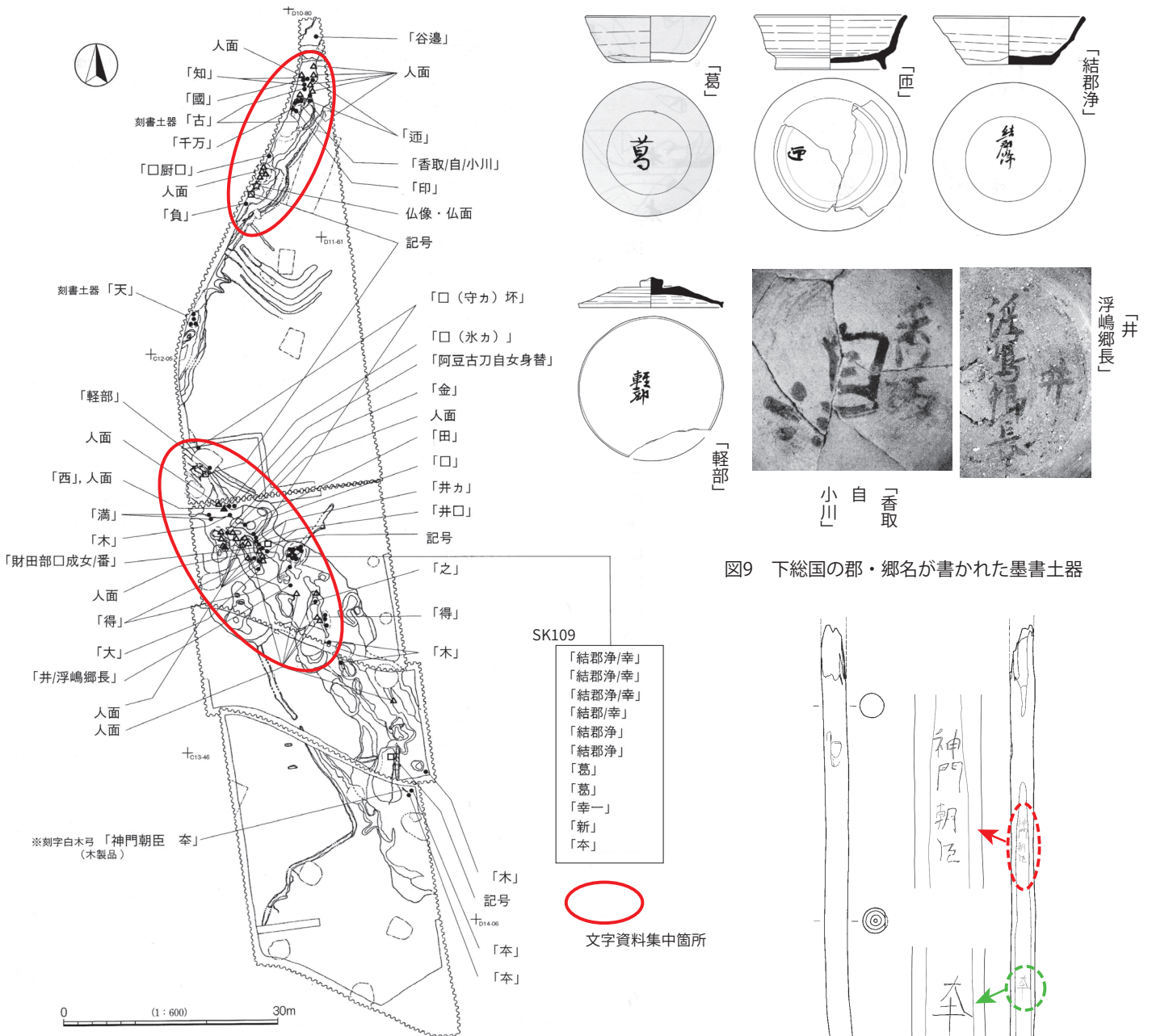


図9 下総国の郡・郷名が書かれた墨書土器

図8 墨書土器主体の文字資料出土地点

郷とも想定されます。

また、国府との関係を示す墨書土器に「□（守カ）坏」があります。「守坏」と読めるならば、「守」は大寶律令後にできた官職（「守」は長官、「介」は次官、「掾」は三等官、「目」は四等官）の最上官位で、都から派遣された国司の長官を指しています。この墨書土器の出土は、本遺跡に下総国府の長官が関与していたことを意味しているものと想定されます。他には、「神門朝臣 奉」の線刻を有する白木弓も注目されます。これについては、『日本三代実録』貞観二（860）年二月十四日条にある下総介に任じられた「神門臣氏成」との関わりが想定され、「下総介神門（朝）臣」が国府内での祭祀に伴って自らの名を刻んだ白木弓を奉った可能性も考えられます。

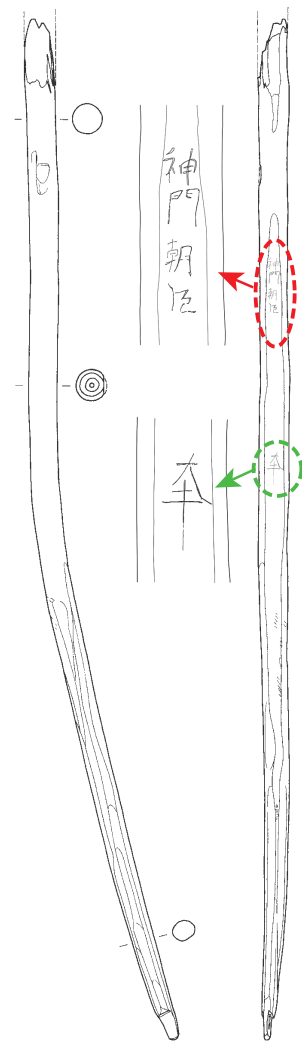


図10 白木弓

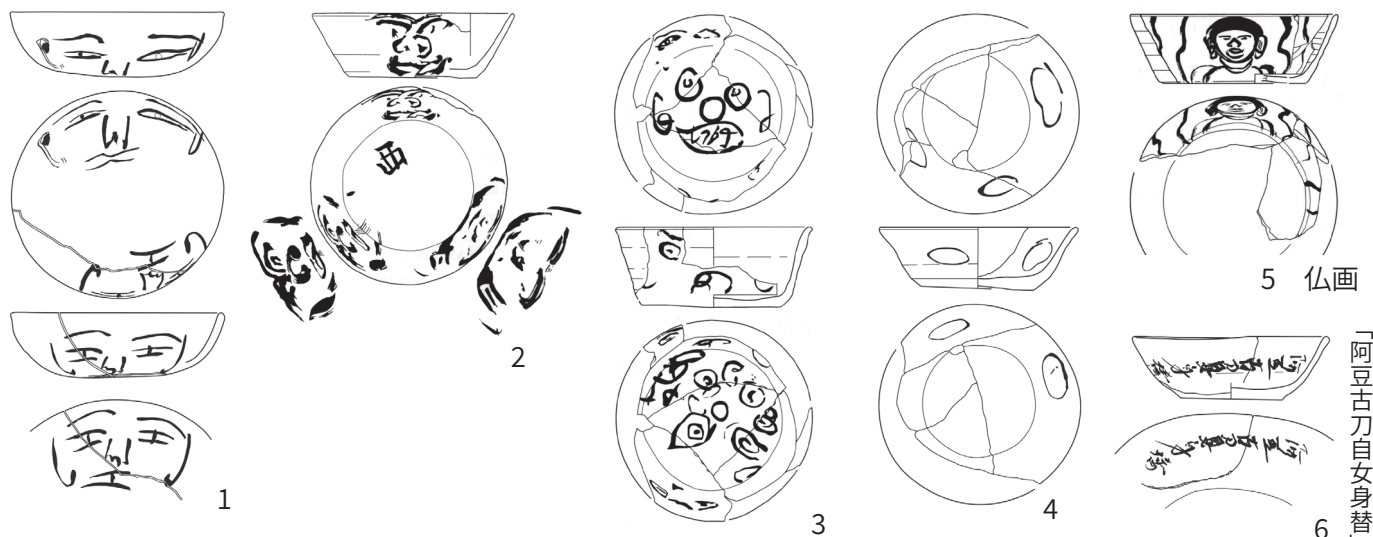


図11 人面 (1～5) と多文字資料 (6)

本遺跡出土の墨書土器の大きな特徴に、破片を含めて33点確認された人面墨書土器があります。描かれた人面の面相は多様ですが、大半は眉・目・鼻・口が描かれ、顔の輪郭や頭髮は表現されていません。また、耳や顎ひげ・頬ひげなども特徴的です。中には、則天文字の一種である「凡」の内部に簡略化した人面を加えるものや「〇」のみで人面を表した可能性のあるものも確認されています。仏画が描かれた珍しいものも含まれています。これらの人面墨書土器は、

先述した多文字墨書土器に伴う人面とは異なり、人面単独で土器に描かれています。このようなあり方は、平城京などの宮都の人面墨書土器と共通しており、祓の儀式の道具として人形や齋串とともに用いられ、下総国府の祭祀場としての性格を示しています。一方、「阿豆古刀自女身替」と書かれた多文字墨書土器が出土しています。この記載形式は、印旛沼周辺の多文字墨書土器と類似したものとなっていますが、「奉」や「進上」などの定形的な文字がなく、印旛沼周辺とは異なった目的の墨書土器ではないかと考えています。

旧河道を中心とする本遺跡は、下総国府域の境界にあたる川辺において、官人により執り行われた儀式・行事（境界祭祀）の場として、8世紀後葉頃から10世紀頃まで、長期にわたり維持管理された区域であったと捉えることができます。

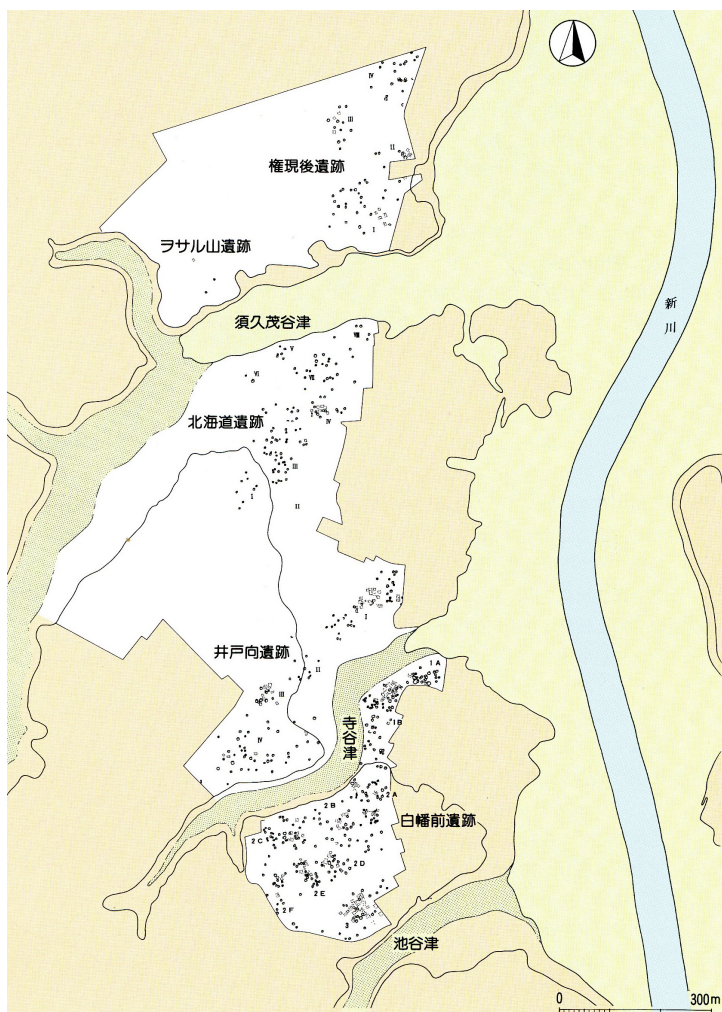


図12 萱田遺跡群各遺跡位置図

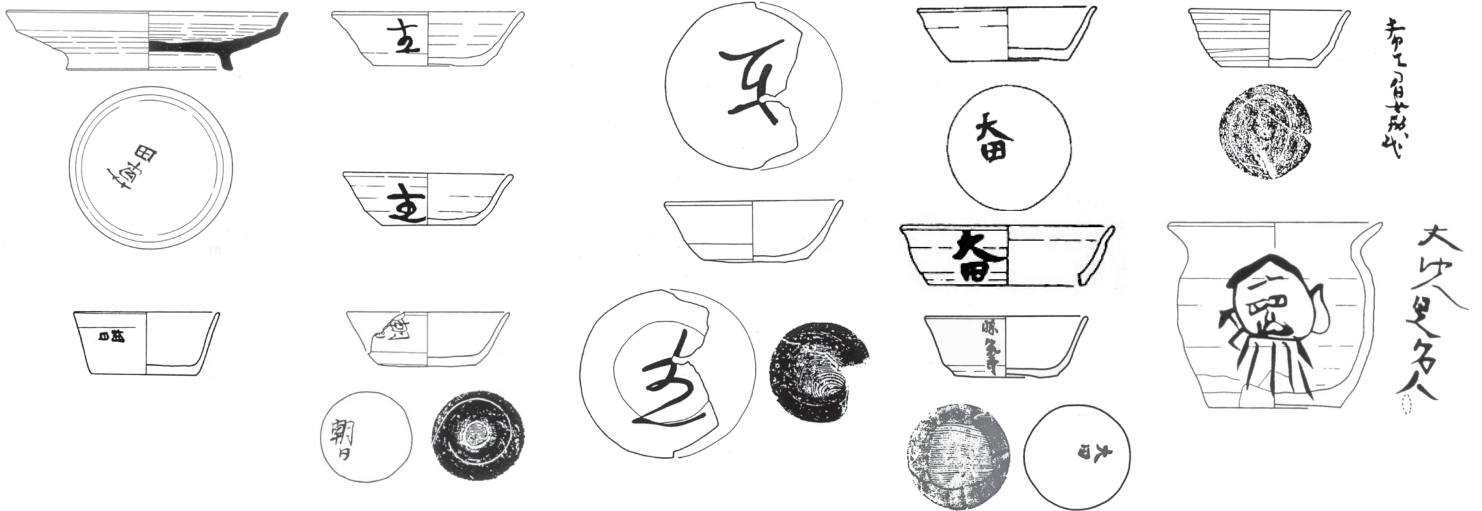


図13 萱田遺跡群の主な墨書土器（1・2・5・11白幡前遺跡、3権現後遺跡、4・6・9井戸向遺跡、7・8・9北海道遺跡）

(4) 地域開発のようす—八千代市萱田地区遺跡群—

地域における「開発型集落」の様相を如実に示しているのが、八千代市萱田遺跡群（現在のゆりのき台）です。主な集落遺跡としては白幡前遺跡・井戸向遺跡・北海道遺跡・権現後遺跡があげられ、特にその中心となるのが白幡前遺跡です。弥生時代後期の集落が途絶えた後は台地上での生活の痕跡はなく、7世紀中葉頃になって開発を伴う新たな集落が形成されるようになります。8世紀後葉頃に爆発的に拡大した集落は9世紀後葉まで継続し、10世紀代になると急速に終息に向かっていきます。7世紀中葉以降の遺構は、竪穴住居跡 222 軒、掘立柱建物跡 150 棟などで、萱田地区遺跡群では最大の集落となっています。出土した墨書土器は 827 点で、萱田地区遺跡群内では突出した量となります。墨書土器の出現は 8 世紀第 2 四半期の「草田」と書かれた 1 点のみで、現存する「萱田」を示す地名と考えられます。8 世紀後葉以降は集落の拡大とともに墨書土器の点数も急激に増加しています。出土点数の多い文字は「生」の 87 点で、「夫」45 点、「廓」44 点、「継」42 点などです。それぞれの文字が異なった地点から出土していることから、一定の居住範囲の集団を標識する文字と考えられます。

一方、各遺跡間で共通する文字が確認されます。白幡前遺跡の「生」は井戸向遺跡と権現後遺跡でみられ、井戸向遺跡の「朝日」・「大田」は北海道遺跡で出土しており、集落拡大の 8 世紀後葉以降に各遺跡間の関係が密になる状況が伺われます。大規模な開発を伴う集落の出現には、白幡前遺跡や権現後遺跡・北海道遺跡でみられる「丈部」の墨書土器から、印波国造の流れをひく丈部直とその支配下にあった丈部が大きく関わっていたことが考えられます。集落の規模や墨書土器の広がりなどから、中心的な存在である白幡前遺跡を拠点として周囲の開発を進めていったものと思われる。

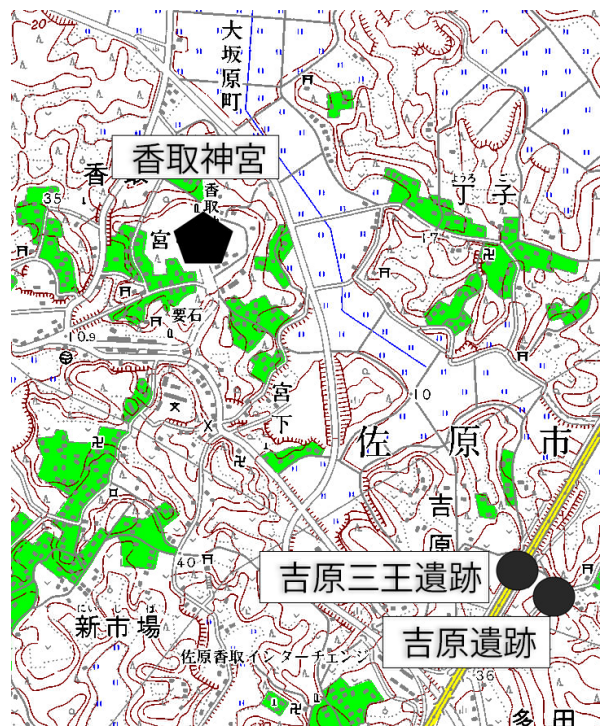


図14 吉原三王遺跡位置図

(5) 香取神宮の神戸集落—香取市  
吉原三王遺跡—

東関東自動車道建設に伴う調査で、8世紀初頭から9世紀末を主体とする109棟の竪穴建物跡が見つっています。本遺跡で最も注目されるのが、023号竪穴建物跡（9世紀中葉頃）から出土した多くの墨書土器です。「□香取郡大坏郷中臣人成女之替承□」と書かれた多文字墨書土器の「大坏郷」は、天平勝宝二年（750）一二月二八日の治部省牒（正倉院文書）中に「下総国香取郡神戸大槻郷」との記事が見られます。「神戸」とは、特定の神社の祭祀などを支えた社領であることから、「香取郡大坏（槻）郷」は香取神宮の神戸郷と位置付けられ、多文字墨書土器の内容は、香取神宮に奉仕する神戸の女性（中臣人成女）の交替を指示したものと考えられます。墨書土器の出土状況をみると、西側の床面から覆

土上層にまで及び、中には建物外からのものも見られることから、建物の西側で女性の交替に伴う祭祀あるいは儀礼的なものが行われ、その後建物内へ廃棄されたものと想定されます。また、墨書土器の中には、人名として「加万附申上」・「□部伊加」・「伊加万」・「真□伊加万」などがあり、「真髪部伊加万」という人物が浮かび上がってきます。この人物が交替に関わった可能性も想定されます。

一方、地名墨書土器として、「吉原大島」、「吉原仲家」、「大島」、「八富」、「濱」が見られます。平安時代後期から江戸時代に至る文書を集成した『香取大禰宜家文書』中には、香取社領34ヶ里の条里名としての「吉原」、大禰宜職に付属する金丸犬丸各島の村名としての「大島」

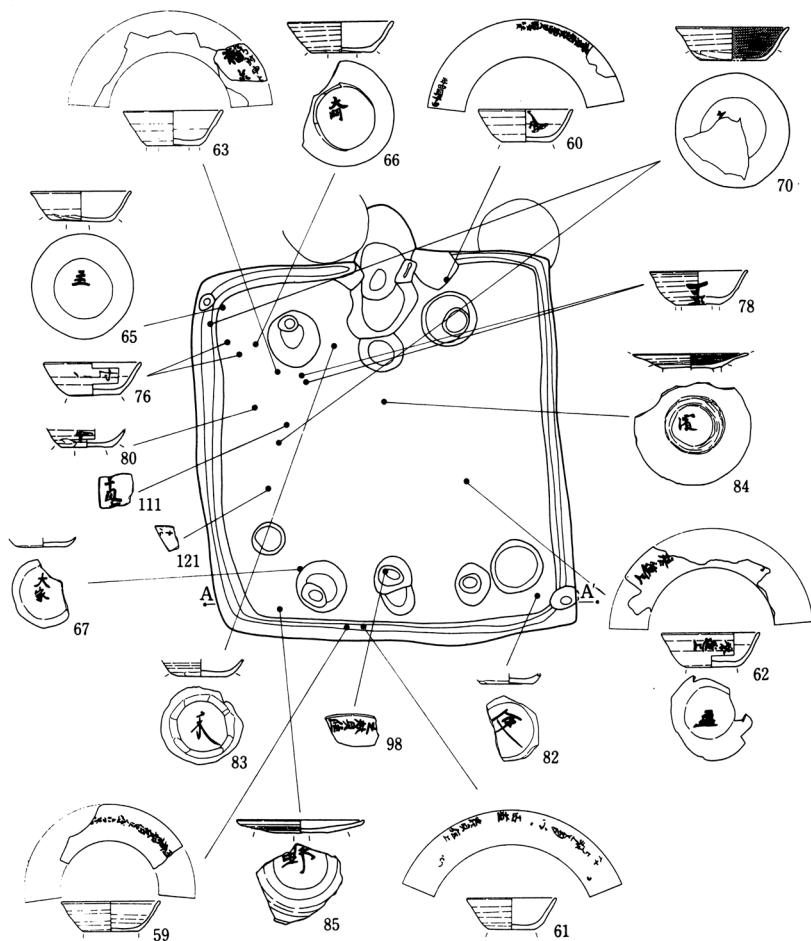


図15 023号竪穴建物跡

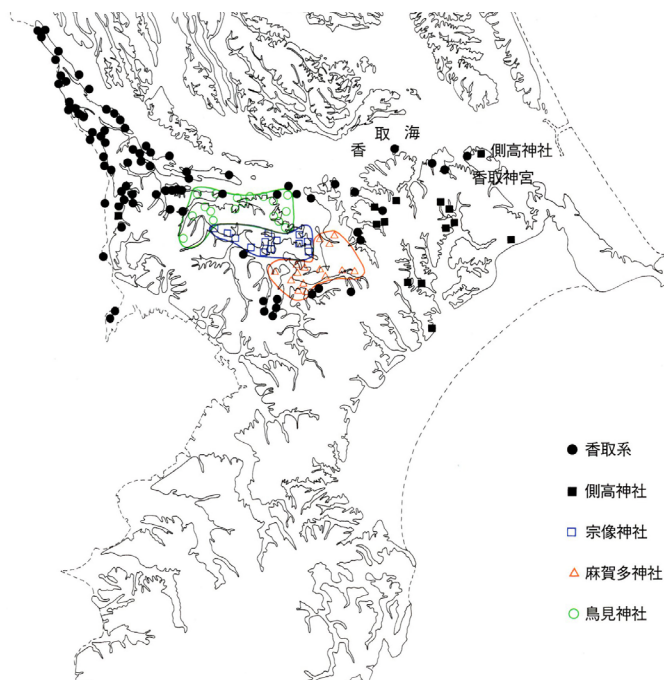


図16 下総周辺の香取敬及び印旛沼周辺の在地区系神社分布図

などが確認されます。

香取神宮との関係が想定される吉原三王遺跡の多文字墨書土器が印旛沼周辺とは異なる祭祀・儀礼の可能性が高いという点で参考になるのが、香取系神社と印旛沼周辺に集中する麻賀多神社・宗像神社・鳥見神社の分布です。香取系神社は利根川沿いに広く分布していますが、印旛沼周辺は空白域となっています。この状況は、印旛沼周辺には頑なな在地神への信仰が連綿と受け継がれ、外部の国家的な神である香取神に対する拒絶の表れとも指摘されており、多文字墨書土器の地域性を考える上で興味深い視点と思われます

## 5 おわりに

全国最多の出土量を誇る墨書土器を手がかりに、下総地域を中心とした古代房総の社会やくらしをみてきました。印旛沼周辺に集中する多文字墨書土器は、当該地域の神に対する独特な信仰のあり方を具体的に示す資料として重要な資料となっています。また、下総国府東端境界での官人によって執り行われた水辺の祭祀場としての市川市北下遺跡、奈良時代以降の地域開発のようすが示された八千代市萱田遺跡群、香取神宮との関係が想定された神戸集落としての香取市吉原三王遺跡のように、遺跡の全容を理解するうえで墨書土器が重要な位置を占めていることが明らかとなりました。

### 主な参考文献

阿部寿彦 1999 「神へのまつり」『平成 11 年度出土遺物展 (25 周年記念展) 今、古代史がおもしろいー出土文字からさぐる房総の古代ー』(財)千葉県文化財センター

阿部寿彦 2004 「神へのまつりと祓の流行」『千葉県の歴史 資料編 考古 4 (遺跡・遺構・遺物)』千葉県

天野 努ほか 2001 「古代房総の村落」『千葉県の歴史 通史編 古代 2』千葉県

加藤友康 2023 「墨書土器と情報伝達」『墨書土器と文字瓦ー出土文字史料の研究ー』 八木書店

川尻秋生 2023 「寺院の墨書土器」『墨書土器と文字瓦ー出土文字史料の研究ー』 八木書店

栗田則久 1993 「古代集落と墨書土器」『月刊文化財』362 第一法規

栗田則久 2009 「墨書土器と印旛」『房総と古代王権ー東国と文字の世界ー』 高志書院

栗田則久 2023 「集落の墨書土器」『墨書土器と文字瓦ー出土文字史料の研究ー』 八木書店

高島英之 2009 「古代印旛と多文字墨書土器」『房総と古代王権ー東国と文字の世界ー』 高志書院

平川 南・栗田則久 1986 「佐原市吉原三王遺跡出土の墨書土器」『考古学雑誌』71-3 日本考古学会

矢越葉子 2023 「データベースからみた墨書土器」『墨書土器と文字瓦ー出土文字史料の研究ー』 八木書店

山路直充 2023 「下総国府から考える人面墨書土器祭祀」『墨書土器と文字瓦ー出土文字史料の研究ー』 八木書店

※全国の墨書土器データベースが明治大学日本古代学研究所のサイトで公開

(「全国墨書土器・刻書土器、文字瓦横断検索データベース (<https://bokusho-db.kodaishiryu-db.jp/>)

## 考古資料から見る千葉県の中近世

津田芳男

千葉県の中近世については、文献資料から多くの事が明らかにされています。中世では、鎌倉幕府の成立に協力した房総地域の武士団とその興隆、南北朝期の動乱、そして戦国期の政治的再編に伴う攻防などが知られています。また近世になると、徳川家康の関東入府後千葉県内は幕領、大名領、旗本領が混在するようになり、社会的な変化が起こります。また江戸に隣接するため幕府の鷹場や牧が作られる等、政治的、経済面などでも深いつながりがありました。

このような状況は、発掘調査で得られた考古資料からも、うかがい知ることができます。また文献資料に記録されなかったものも、考古資料から読み解くことも可能です。ここでは発掘成果をもとに、千葉県の中近世について述べてみたいと思います。

文化庁の『埋蔵文化財関係統計資料 一令和3年度一』によると、千葉県全体の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）数は27,562か所で、そのうち中世は699か所、近世が353か所とされています。また財団が調査した遺跡で、何らかの中近世の遺構・遺物が見つかった遺跡は、2021年3月時点で632遺跡に及びます。そしてこれらの調査から得られた成果は、城館跡をはじめとして村落、墓地、塚など多岐にわたります。まず個々の遺跡について述べていきたいと思います

### 城館跡

県内の城館跡は、中世初頭の館から幕末の台場まで、多数存在します。まずこれら城館跡について見ていきます。

中世初期の館跡の好例として、安房郡鋸南町に所在する下ノ坊B遺跡があげられます。下ノ坊遺跡は、標高11mの河岸段丘上に築かれた遺跡です。調査の結果、方一町（約100m四方）の堀で囲まれた居館跡であることがわかりました。遺跡からは掘立柱建物跡（6棟）、井戸（3基）、堀跡（7基）、溝（11本）、土坑などが

検出され、貿易陶磁（青磁・白磁）、国産陶器（瀬戸・常滑・美濃）、刀子、銭貨、硯、土師質土器などが出土しました。また低地に所在するため、木製容器、漆器といった木製品が出土したことも特筆されます。



写真1 下ノ坊遺跡B地点全景



写真2 下ノ坊遺跡SA1・SB5全景

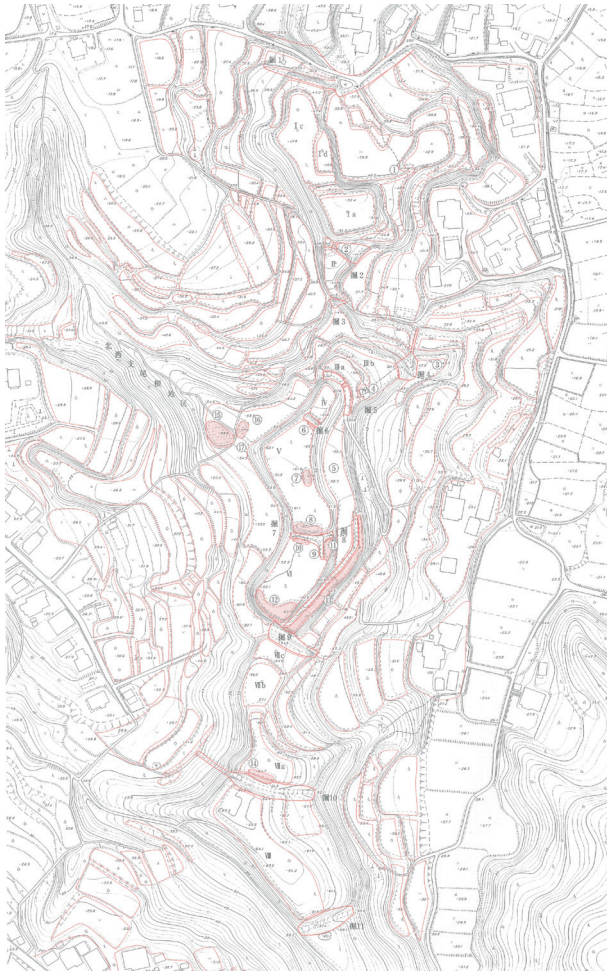


図1 笹子城調査区概念図



写真3 笹子城平場6・7



写真4 笹子城階段状虎口

出土品の質と量から、当地が海上交通・交易の要衝であり、鎌倉とのつながりも深かったと考えられます。中世武士の居館跡としては千葉県内でも

数少ない発掘事例であり、地域支配の実態を示す貴重な資料といえます。この居館は15世紀前半に廃絶し、その後、戦国大名里見氏が台頭する時代へと変わります。

笹子城は、文明年間（1469～1487年）に真里谷信興が築いたとされる、真里谷武田氏の支城群の一つです。標高70m程の丘陵に、南北約850m、東西約400mの規模を持つ、大規模な城郭です。

調査は城郭の北端部で行われ、22条の堀跡、15か所の腰曲輪（平場）が検出されました。出土遺物は貿易陶磁、瀬戸美濃などの国産陶器や在地産の土器類、金属製品、石製品、銭貨など多量に出土しました。特に陶磁器類の出土量は、千葉県内で群を抜いています。また珍しい遺物として水晶五輪塔、独鈷杵、銅製分銅、中国製茶入等が出土しています。

日常に使われる陶磁器類も多く出土し、平場では多数の建物跡や土坑などが検出されたことから、城内に生活空間が作られていた事が分かります。また廃城行為にあたって埋められた堀から多くの石塔が出土しているため、城内に墓域も営まれていたと考えられます。 笹子城は15世紀中葉に築かれ、16世紀中葉には廃城となったと考えられています。出土遺物がこれを裏付けています。城郭の規模や出土遺物の内容などは、戦国時代後半の広域領主の城郭であることを映し出しています。

#### 村落

中世の村落の例として、袖ヶ浦市の荒久(2)遺跡を取り上げます。荒久(2)遺跡は縄文時代から中世にわたる遺跡で、中世では、集落に関する遺構や遺物が発見されています。遺跡は鎌倉街道に面し、遺跡の北東約500mには行基の開山と伝わる延命寺があり、ちょうど寺の門前にあたる場所に位置しています。



城の外郭として機能していたものと考えられます。

遺跡の成立は16世紀前半と考えられており、多数の遺構、遺物が検出されています。このうち中世の遺構の中核になるものは掘立柱建物跡で、分布は西区に集中し東区からは検出されませんでした。規模は小さいもの、重複関係が多く継続して掘立柱建物が営まれたと考えられます。

17世紀以降は明確な住居遺構は検出されませんが、陶器などの遺物が竪穴状遺構などから多量に出土しています。これは本佐倉城廃城後も居住が継続し、近代の明治まで続いた事を表しています。

#### 墓地と信仰

餓鬼草子には、墓地で戯れる餓鬼たちが描かれた場面があります。五つの盛り土をした墓が描かれており、盛り土だけのものあれば、頂上に仏塔を立てまわりを木の柵で囲んでいるもの等様々です。その墓の間に、放置された死体が描かれています。餓鬼草子は、12世紀に作成されたと考えられていますので、その時期の葬地の様相を描いたものと思われる。

考古学で確認できる中近世の葬送方法は、土葬による土坑墓と、火葬によるものが認められます。土葬のものは、長方形または長円形の土坑に埋葬されています。火葬では、蔵骨器に火葬骨を納めたものと、土坑の中から直接火葬骨が見つかるものがあります。これは土坑に直接埋葬したものか、遺存しにくい有機質の容器に納めた後に、埋葬されたのかを判別しなければなりません。

中世初期の墓は土葬で、その後蔵骨器を使った火葬墓が広まったと考えられています。副葬品は少なくカワラケ・銭貨・陶磁器類、近世ではキセルなどがみられます。ただ中世初期の土坑墓では、鏡などの副葬品を伴う事例が多くみられます。これらは屋敷墓と考えられるものも多く、また調査例の少ない初期の墓から貴重な副葬品が出土するなど、限られた階層の墓と考えられます。

その後、墓の実態は不明な部分が多いが、15世紀後半になると土坑墓の数が増加し、流山市市野谷宮後遺跡（南側）のような、集団墓が形成されます。そして東金市前畑遺跡のように、火葬墓と土坑墓が共存する例も見られます。なお市野谷宮後遺跡の墓は、近世まで継続します。

蔵骨器は、古瀬戸や渥美・常滑の壺を使うものが多いが、千葉市廿五里城では、古代の土師器甕や須恵器長頸壺が使われています。廿五里城では、火葬骨を納めた蔵骨器の蓋に使用したと考えられる坏に『無量寿経』の一節が墨書されており、中世の浄土宗的葬送儀礼の信仰に基づいて行われたことを示す、貴重な事例です。

火葬墓、土坑墓の例を述べましたが、それ以外の形をとるものもあります。千葉市の廿五里城では、塚墓という特殊な墓が検出されました。これは常滑焼の大甕を棺とし、棺の埋納後土を積み上げ塚を築いたものです。また大甕に遺体を納めた、甕棺墓も見られます。



写真7 餓鬼草子に描かれた中世の墓地の様子



写真8 久我台遺跡SK263 和鏡出土状況

13世紀、鎌倉の影響で石塔の造立が盛んになります。千葉県では石塔に適した石材が産出しないので、他地域の石塔が持ち込まれています。五輪塔、宝篋印塔といった石塔は、供養塔として造立されたものも存在しますので、必ずしも墓塔ではありません。しかし板碑とともに、当時の葬制を表しています。

六道銭を副葬する風習が何時からなのかは、よくわかっていません。市原市山倉1号墳で見つかった中世墓は、12世紀末から13世紀初頭の常滑大甕に女性が埋葬されていましたが、ここから銭が出土したと伝えられています。現在銭の所在が不明なため詳細は不明ですが、仮にこれを六道銭とすれば、鎌倉時代には行われていたこととなります。ただ例が増えるのは15世紀になってからで、それは近世、いや現代まで続きます。

千葉県（房総）のやぐらは古墳時代の横穴墓を中世に転用した例が極めて多く、半数近くが、横穴墓を転用しています。山崎横穴群4号址も横穴墓の転用と言われる事も多いですが、山崎横穴群は東上総特有の高壇式の横穴墓ですが、4号址は高壇を持ちませんので、やぐらとして築かれたものと思われます。出土した宝篋印塔・和鏡・馬頭骨などから、被葬者の社会的地位や宗教的背景がうかがえます。なお出土した鏡は菊花双雀鏡で、14世紀のものとしてされています。

#### 千葉県で見られる陶磁器類

遺跡からの出土遺物には、貿易陶磁器・国産陶器・地元産土器などがあります。これらは、中世の生活様式や交易の様子を反映しています。また古瀬戸などの出土品は、編年（年代推定）を通じて、遺跡の成立時期や変遷を把握することができます。

千葉県で出土する主なものは、青磁・白磁などの貿易陶磁、常滑・渥美・古瀬戸といった国産陶器、そして在地産土器があります。

鎌倉時代から南北朝期では、貿易陶磁は白磁の皿や龍泉窯の青磁碗が、国産陶器では常滑窯の甕・捏鉢・三筋壺、渥美窯の甕・鉢・壺があります。渥美窯の製品は13世紀末には姿を消し、瀬戸窯の製品が出土するようになります。器種は四耳壺や梅瓶・水注・水滴といった、貿易陶磁を模倣したものです。

室町時代では、貿易陶磁器は青磁の無文の碗や、白磁の高台付き小皿。国産陶器は瀬戸窯製品が急激に増加し、器種も貿易陶磁の模倣品から、日常食器類に変わります。また15世紀になると、瀬戸窯でも摺鉢を生産するようになります。常滑窯製品は、大形の甕と片口鉢に限られるようになり、産地による器種の住み分けが行われたようです

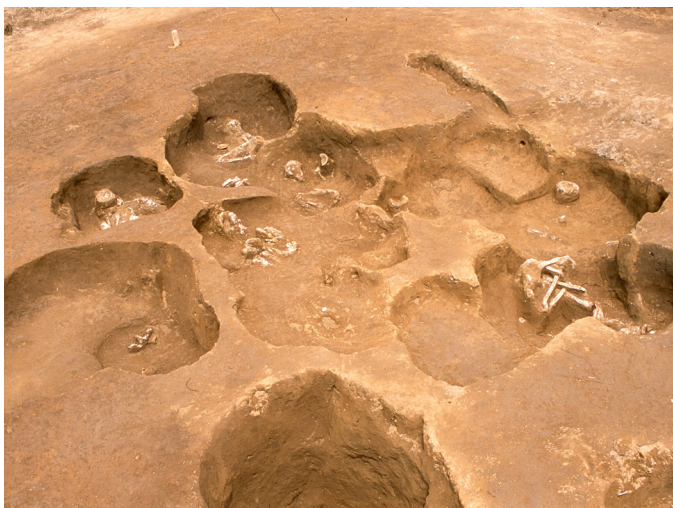


写真9 市野谷宮後遺跡（南側）土壇墓群



写真10 山崎横穴群4号址全景

戦国時代では、貿易陶磁器は白磁の小皿以外に染付が多くみられ、青磁は碗、稜花皿などが見られます。国産陶器は、瀬戸・美濃窯製品が皿・播鉢中心に多く供給され、常滑窯製品は、大型の甕に限定されます。在地産のものは、素焼きの器である、かわらけがあります。また15世紀になると内耳土器や土器すり鉢が作られます。

中世の調理具

古代で主流であった煮炊き具の土師器甕は、10世紀代から減少し中世には見られなくなります。おそらく鉄製の鍋に取って代ったと思われる。遺物として出土例が少ないのは、土器より破損しにくく、破損後も鉄素材としてリサイクルできたからでしょう。鉄鍋の出土例は、墓もしくは墓と推定される遺構に副葬されたものに限られます。

すり鉢の出現も、中世での画期の一つと言えます。砕く・擂る・こねるという調理法が可能になり、粉食文化が成立します。すり鉢は、12世紀代には列島規模で広域流通するようになります。すり鉢によって製粉が可能になっても、さらに良質な製粉を可能にするのは、石臼の登場を待たなければなりません。『日本書紀』によると、推古天皇18年（610年）に高句麗から来た僧・曇徴（どんちよう）が碾磑（てんがい）を造ったと記されています。「碾磑」は中国語で回転式の石臼を意味しますが、この記述を裏付ける考古学的証拠はありません。実際に石臼が普及するのは、15世紀以降になります。この時期の遺跡からは、多くの石臼が出土しており、石臼の使用は一般的になったのでしょう。

食器にも変化が見られます。古代末から土師器坏・碗は減少し、中世には消滅します。これに代わる器は見られないので、木製の器（漆器など）に変わったと思われます。陶器の皿や碗は、貿易陶磁を除くと、14世紀頃の瀬戸製品流通によって現れます。そして土器の器は宴会用の器「かわらけ」となり、これは1回の使用を前提とした器です。素焼きの粗末な器ですが、これらが大量に出土する遺跡は、儀式などを行った遺跡であった可能性が高いです。また口縁部に煤が付着したかわらけも見られるので、燈明皿としても使われていました。

15世紀になると、内耳土器（土鍋）や土器製のすり鉢が見られるようになります。ともに鉄鍋や陶器のすり鉢の、模倣と考えられています。道具としては、鉄鍋や陶器製のすり鉢の方が、優れている事は間違いありません。これらが生産・流



写真11 松虫陣屋出土陶磁器類

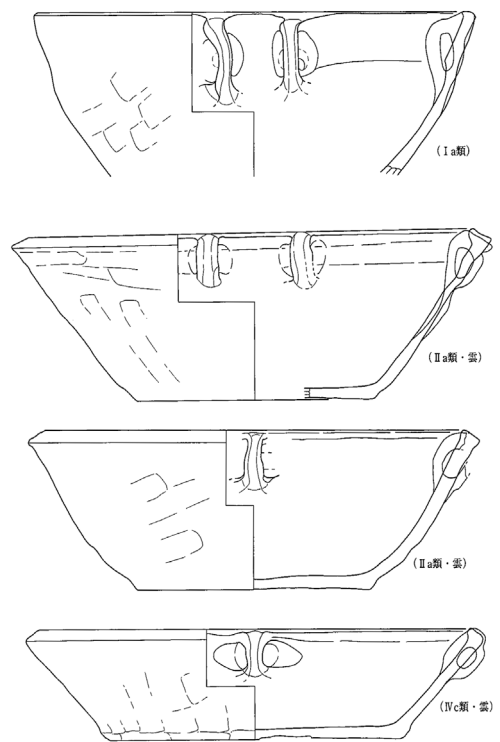


図4 松虫陣屋出土 内耳土器

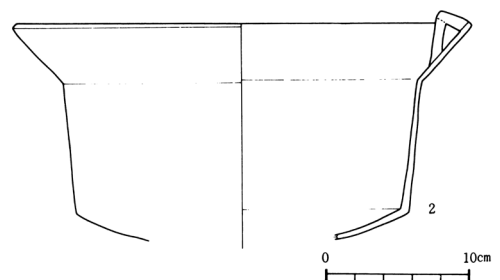


図5 山崎横穴20号址出土 鉄製内耳鍋

通された背景は、生産・流通の減少、もしくは需要の増大などが考えられます。ただ千葉県ではこれらの出土は下総地域が中心で、上総南部や安房地域では見られません。普遍的な理由ではなく、地域的な問題があったのでしょうか。

#### 近世の牧

千葉県の牧は歴史が古く、古代からその存在が知られています。江戸時代、房総には江戸幕府による官営の牧が設置され、軍馬育成のための放牧地として極めて重要な役割を果たしました。牧は東葛地域に小金牧、印旛地域に佐倉牧、そして安房地域に峰岡牧が設置され、さらにその中をいくつかの牧に分割されていました。

牧は現代の牧場とは異なり、普段は放牧飼育で、年に一度野馬を集め軍馬として選抜し、幕府に納めていました。

牧の構造は、牧を取り囲むように野馬土手や野馬堀が築かれ、野生馬（野馬）を囲い込むための捕込、そして村との境には木戸が設けられています。野馬土手の目的は馬の逃亡を防ぎ、外部から馬に危害が及ばないようにするために築られました。また新田開発によってできた、周辺の田畑との区切りをもつもの

や、田畑を馬に荒らされないための役割も持っていました。この場合野馬除土手と呼ばれました。

年に一度行われる野馬捕りの様子は名所図会等に描かれ、江戸からも見物客が訪れる年中行事でした。

#### おわりに

千葉県内で調査された、中近世の遺跡について述べました。今回取り上げませんでした。日本最後の城で西洋式城郭でもある松尾城など、興味深い遺跡があります。千葉県の中近世は、武士団の政治的活動と村落の形成、宗教儀礼の変化、食文化の発展が複合的に絡み合う時代でした。特に政治経済の中心地に近接していたため、その影響は大きく、遺跡・遺物の状況にも表れています。文献資料では残りにくい村落の在り方等も、この特色を考慮してアプローチすれば、より深化することも可能でしょう。

#### 主な参考文献

##### 参考文献

- 『千葉県の歴史』資料編 中世1（考古資料）平成10年3月25日 千葉県  
 房総考古学ライブラリー8 『歴史時代』(2) 平成6年3月24日 財)千葉県文化財センター  
 『中世の安房と鎌倉』一海で結ばれた信仰の道一 平成24年3月3日 館山市立博物館  
 『日本の中世墓』築瀬祐一「房総の中世墓」平成21年3月  
 研究紀要第10号 柴田龍司「戦国末期の城郭から見た権力構造」昭和61年3月  
 研究連絡誌37 加藤正信 笹生衛「荒久遺跡の概要」平成5年3月

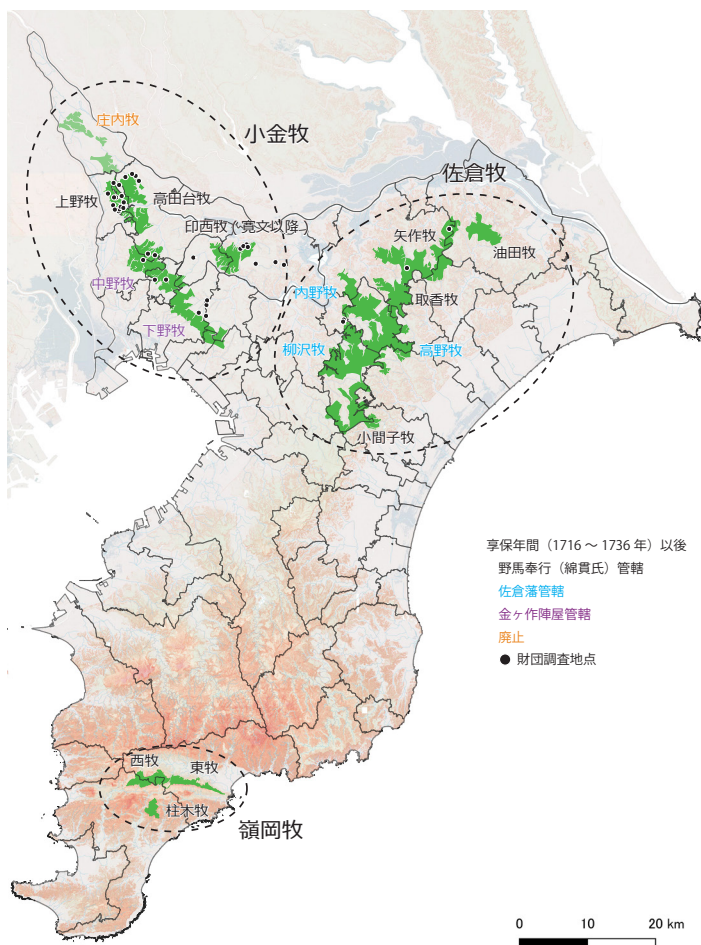


図6 近世牧分布図